

作者不詳
『ローマ共和政偉人伝』
De viris illustribus urbis Romae

- 1 アルバの王**プロカ**にはアムリウスとヌミトルという息子がいた。王は息子らに、一年交代で王位に就き代わる代わる統治せよ、と言い遺した。ところがアムリウスは兄に支配権を譲らなかつたばかりか、彼の血筋も絶やしてしまおうと、その娘レア・シルウィアをウェスタの祭司に任じた。そうして彼女を永久に純潔のままにしておこうとしたが、彼女はマルス神に犯され、レムスとロムルスを生み落とした。そこでアムリウスはレアを牢獄に幽閉し、赤子をティベリス川に投げ捨てたが、水流が彼らを川岸に打ち上げてくれた。彼らの泣き声のする処に牝狼が駆けつけ、自分の乳で赤子を養った。まもなく羊飼いのファウストゥルスが彼らを拾い上げ、妻のアッカ・ラウレンティアにその養育のために託した。後に二人はアムリウスを弑し祖父のヌミトルを王座に復位させると、自身らは羊飼いを糾合して町を建設した。ロムルスは鳥占で勝者となり — なぜなら彼が十二羽の鷹を目撃したのに対し、レムスは六羽しか目にしなかったから — この町を「ローマ」と呼んだ。更に彼は、市壁よりもまず先に法で町の守りを固めようと、何びとたりとも防塁を飛び越えること相成らぬ、と布告した。けれどもレムスはこれを嘲って飛び越えてしまい、そのため百人隊長のケレルに鉄で殺された、と伝えられる。
- 2 **ロムルス**は難民のために避難所を開放し、大軍を興したが、配偶者がいないと気づき、そこで使節を送って近隣諸市からこれを求めた。だが使節が拒絶されたため、彼はコンスアリアの祭りを催すと装い、祭りに大勢の男女がやって来たところで、自分の部下に合図を送り娘たちをさらわせた。彼女らの中でもひととき美しい娘が皆の大絶賛を受けながら運ばれて行くと、彼女はタラッシウスの処に連れて行かれるのだ、との返答が返ってきた。この結婚が幸運な結果に終わったのに因み、すべての結婚で「タラッシウス」という名を使うべしと定められた¹。ローマ人が²近隣諸市の女を掠奪した後、最初にローマに戦争を仕掛けてきたのはカエニナ人であった。ロムルスは彼らに向けて進軍すると、カエニナの軍を叩きのめし、指揮官アクロを一騎打ちで倒した。彼はその「見事な戦利品」³をカピトリウム丘でユピテル・フェレトリウス神に奉献した。女を奪われた報復にローマに対して戦争を仕掛けてきたのはサビニ人であった。そしてローマに迫りつつあった時、彼らはタルペイアという娘が供儀に使うための水を汲みに降りてきたところに出くわした。ティトゥス・タティウスは、もし我が軍を市^{カピトリウム}砦に³導き入れてくれたら好きな褒美を遣わそう、と彼女に申し出た。娘は、貴方たちが左手に持っているものを頂戴、と言った

¹ *Sher. institutum est...uteretur* 「使うべしと定められた」 *Pichl. institutum est...iteretur* 「繰り返すべしと定められてきた」

² *Sher. Romani* 「ローマ人が」 *Pichl. Romani vi* 「ローマ人が力づくで」

³ *Sher. in capitolium* 「市^{カピトリウム}砦に」 *Pichl. in arcem* 「市^{アルクス}砦に」

が、無論それは指輪と腕輪のことであった。ではそれを遣わそう、との約束に騙され、彼女がサビニ人を市砦に^{アルクス}導き入れると、その場でタティウスは盾で彼女を押し潰すよう命じた。というのも、彼らは左手に盾も持っていたからである。ロムルスはタルペイアの丘を占拠していたタティウスに向けて進軍し、現在ローマの広場の^{フォルム}ある場所で戦闘を開始した。ここでホストゥス・ホスティリウスが猛勇を振り戦いつつも討死にし、彼の死でローマ軍は総崩れとなって潰走を始めた。そこでロムルスがユピテル^{スタトル}耐久神に神殿を奉獻する誓いを立てると、偶然かはたまた神通力か、軍は踏み止まったのである。その時伝承では^{バトレス}4掠奪された女たちが進み出て、一方では母として、他方では妻として懇願し⁵、和平を成立させた。ロムルスは条約を結び、サビニ人をローマ市に迎え入れ、サビニ人の町クレスに因んで彼の民を「クイリテス」と呼んだ。彼は百人を元老院議員とし、その忠孝心のゆえに「父祖」と命名した。騎兵から成る三つの百人隊を設立し、これらを自分の名を取り「ラムネス」、ティトゥス・タティウスに因み「ティキネンセス⁶」、そして両者の共有した^{ルクス}聖杜に因み「ルケレス」と命名した。平民については三十のクリア区に配分し、掠奪された女たちの名を取って各々を命名した。だが彼は牝羊沼で軍の閲兵を行っている際中、姿を消してしまった。それが元で元老院と市民との間に争乱が起こると、ユリウス・プロクルスという名の貴族が民会の前に進み出て、誓いを立ててこう宣言した。ロムルスは神々の元へと去りゆく際、クイリナリスの丘でひときわ尊厳なる姿をまとして自分の前に現れ、「民は争いを控え、徳を求めよ。さすれば全世界の盟主となろう」と教示された⁷。この人物の証言は信を得た。そしてクイリナリスの丘にはロムルスを祀る神殿が建立され、彼自身が神として崇められ、クイリヌス神と呼ばれたのである。

- 3 ロムルスが神格化された後、争乱が生じたため⁷、ポンポニウスの子ヌマ・**ポンピリウス**がサビニ人の町クレスより招かれることになった。彼は鳥占の結果が吉と出たのでローマにやってくる、荒々しい民を宗教の力で宥めようと、数々の供儀を定めた。ウェスタ女神の神殿を建て、ウェスタの巫女を選出した。ユピテル神、マルス神、クイリヌス神のための三人の^{フラメン}祭司を定め、マルス神の祭司である十二人のサリイ祭司団⁸ — その長は「^{フラエヌル}舞踊団長」と呼ばれる — を定めた。^{ポンティフェクス・マクシムス}最高神祇官を選任し、双面神ヤヌスの門を建立した。また一月と二月を加えることで、一年に十二の月を割り当てた。そして彼は、数多くの有用な法やその他すべてのものは、彼の妻であるニンフのエゲリアに命ぜられて作っている風を装った⁸。彼は極めて公明正大であり、それゆえ彼に対して戦争を仕掛けようとする者は誰もいなかった。王は病に倒れヤニクムムの丘に葬ら

⁴ *Sher. in memoria* 「伝承では」 *Pichl. in medium* 「中央に」

⁵ *Sher. hinc matres inde coniuges deprecatae* 「一方では母として、他方では妻として懇願し」 *Pichl. hinc patres inde coniuges deprecatae* 「一方では父に対し、他方では夫に対し懇願し」

⁶ *Sher. Ticinenses* 「ティキネンセス」 *Pichl. Tatienses* 「タティエンセス」

⁷ *Sher. cum seditiones orirentur* 「争乱が生じたため」 *Pichl. cum diu interregnum esset et seditiones orirentur* 「長らく王の空位が続き争乱が生じたため」

⁸ *Sher. leges quoque plures et utiles, omniaque ... simulavit* 「数多くの有用な法やその他すべてのものは…装った」 *Pichl. leges quoque plures et utiles tulit, omnia quae gerebat ... simulans* 「彼の行っているすべてのことは…装いつつ、数多くの有用な法案を提出した」

れたが、何年も後にその場所からは書物の入った柩⁹が某テレンティウスの手で掘り起こされた。これらの書物は、若干の供儀にはさしたる根拠の無い旨を記していたため、元老院の決定により焼却処分とされた。

- 4 **トゥルス・ホスティリウス**は対サビニ戦で優れた働きを見せたため王に選任されると、アルバ市に宣戦布告し、その戦を三つ子同士の勝負で終結させた。アルバ市をその将メティウス・フフェティウスの不実の咎で破壊し、アルバ市民にローマに移住するよう命じた。彼は「ホスティリウスの元老院議事堂」を建設し、コエリウス丘をローマ市に加えた。だがヌマ・ポンピリウスを模倣して犠牲を捧げている最中、ユピテル^{ユリキウス}顕現神を宥めることができず、雷に打たれて王宮もろとも焼死した。

ローマとアルバの間に戦争が勃発した際、両軍の将ホスティリウスとフフェティウスは、少人数の勝負で¹⁰事を終わらせるのが良かろうと考えた。そしてローマ方にはホラティウス家の三つ子があり、アルバ方にはクリアティウス家の三兄弟がいた¹¹。条約が結ばれ彼らが打ち合う中、たちまちローマ側の二人が討死にし、アルバ側の三人が手傷を負った。一人残ったホラティウスは無傷ではあったものの、三人相手では互角の勝負にならないので、逃げ出す振りを装い、間合いを見計らって一人ずつ倒していった¹²。そして戦利品を背負って引き揚げる途中、妹に出会ったが、妹は自分の婚約者であったクリアティウス兄弟の一人の軍服を目にして嘆き始めた。兄はその彼女を殺した。この咎により彼は二人委員の法廷で断罪されたが、民会に上訴した。そこで彼は父の涙のおかげで赦免され、民会によって償いのために^{くびき}頸木の下へと送られた。この頸木は今も道をまたいで架かっており、「妹の頸木^{ソロリウム}」と呼ばれている。

アルバ軍の将メティウス・フフェティウスは、自分が戦争を三つ子の勝負だけで終わらせてしまったことで市民の憎悪を受けていると悟り、事態を正そうと、ウェイイ市とフィデナエ市を対ローマ戦に焚きつけた。彼自身はトゥルスの¹³援軍として召喚されたが、軍勢を丘の上に撤退させ、成り行きを見守っていた。この状況を呑み込んだトゥルスは、メティウスは私の命令でそのようにしているのだ、と大声で叫んだ。これを聞いた敵軍は怖れをなし、敗北した。翌日メティウスがトゥルスに祝辞を送るべく現れると、彼は王の命令で四頭馬に縛り付けられ、八つ裂きにされた。

- 5 **アングス・マルキウス**はヌマ・ポンピリウスの母方の孫にあたり、その公正さと宗教心において祖父に似ていた。彼は戦争でラティニ人を征服した。アウエンティヌス丘とマルキウス丘を¹⁴

⁹ *Sher.* fercula 「柩」「輦台」 *Pichl.* arcula 「小箱」

¹⁰ *Sher.* certatione 「勝負で」 *Pichl.* certamine 「戦いで」

¹¹ *Sher.* Et erant 「そして…いた」 *Pichl.* Erant 「いた」

¹² *Sher.* singulos per intervalla interfecti 「間合いを見計らって一人ずつ倒していった」 *Pichl.* singulos per intervalla, ut vulnere dolor patiebatur, insequentibus interfecit 「傷の痛みが襲う間合いを見計らって、一人ずつ追っ手を倒していった」

¹³ *Sher.* Tullo 「トゥルスの」 *Pichl.* ab Tullo 「トゥルスによって」

¹⁴ *Sher.* Aventinum et Murcium montes 「アウエンティヌス丘とマルキウス丘を」 *Pichl.* Murcium et

ローマ市に加え、新しい市壁で町を囲った。船の建造に用立てるため森林を接收し、塩田にかかる税を定めた。彼は牢獄を建設した最初の人物であった。また海運に適した植民市として、オスティアをティベリス川の^{オスデイウム}河口に建設した。彼は外交使節が賠償要求を行う時に行使するための「外交祭司法」をアエクイクリ族から模倣したが、この法はフェルトル・レシウスが最初に考案したものであった¹⁵。だがこれらの業績を数日のうちに成し遂げた後、夭折してしまったため、期待通りの王であると実際に示すことは叶わなかった。

6 ルキウス・タルクイニウス・プリスクス・ルクモは、キュプセロスの僭主政を逃れてエトルリアに移住したギリシア人デマラトスの息子であった¹⁶。彼自身は「ルクモ」と呼ばれていたが、タルクイニウス市を發ってローマへと向かった。町に辿り着こうという処で、鷲が彼の頭巾をさらってしまった。だが鷲は高くまで舞上がると、再びそれを元に戻した。ト占に長けていた妻のタナクイルは、これは王位が彼のものになる予兆なのだ、と悟った。タルクイニウスはその財力と勤勉さで地位を築き上げ、更にはアヌクス王の最賈さえも手に入れた。そしてアヌクス王にその子供たちの後見人となるよう遺言されたが、彼は王位を篡奪し、まるでそれを合法的に手に入れたかの如くに行使した。彼は百人の議員を元老院に選出し、これらは「小氏族」出身議員と呼ばれた。また騎士の百人隊の数を倍増させたが、ト占官アットゥス・ネウィウスの判定に妨げられ、その名を変えることは叶わなかった。なぜならアットゥスは^{キルクス・マクシムス}剃刀と砥石を使って彼のト占術の信憑性を証明してみせたからである。王は戦争でラティニ人を征服し、^{トーガ・ブラエテクスタ}大競技場を建設し、大競技祭を創設した。サビニ人と古ラティニ人に対する戦勝の凱旋式を挙げ、石の市壁でローマ市を囲った。十二歳になる息子には、戦闘で敵を倒したとの由で紫縁の長衣と護符を受け、この時以降これらは自由民の少年のしるしとなった。だが後に彼は、アヌクスの子供たちの送り込んだ刺客の策略にかかって王国から¹⁷呼び出され、弑された。

7 セルウィウス・トゥリウスはコルニクルム人プルス¹⁸と捕虜のオクレシアの息子であった。彼がタルクイニウス古王の館で養育を受けている頃、炎が現れて彼の頭部を包み込むことがあった。この光景に、タナクイルはこれが最高の地位を予兆しているのだと悟り、この子を自分の子らと同じように育てよう夫を説き伏せた。彼は青年になった時、娘婿としてタルクイニウスに迎え入れられ、そして王が殺害された時には、タナクイルが高みより¹⁹民衆を見下ろしてこのように告げた — 古王は極めて重い傷を負ったが、致命的なものではなく、当面自分が回復に向か

Ianiculum montes 「ムルキウス丘とヤニクルム丘を」

¹⁵ *Sher. Fertor Resius excogitavit* 「フェルトル・レシウスが考案したものであった」 *Pichl. fertur Rhesus excogitasse* 「レススが考案したものであったと伝えられる」

¹⁶ *Sher. Priscus Lucumo graeci Demarati filius qui...* 「プリスクス・ルクモは…ギリシア人デマラトスの息子であった」 *Pichl. Priscus, Demarati Corinthii filius, eius, qui...* 「プリスクスは…コリントス人デマラトスの息子であった」

¹⁷ *Sher. regno* 「王国から」 *Pichl. regia* 「王宮から」

¹⁸ *Sher. Puri* 「プルス」 *Pichl. Tullii* 「トゥルス」

¹⁹ *Sher. altiore* 「高みより」 *Pichl. altiore loco* 「高所より」

う間は、民がセルウィウス・トゥリウスの命に従うよう御所望にあらせられる、と。セルウィウス・トゥリウスはまるで請われてであるかの如くに統治を開始したが、それでも適正に支配権を行使した。彼は幾たびもエトルリア人を征服し、クイリナリス丘、ウィミナリス丘、エスクイリアエ丘をローマ市に加え、防壁と掘割を造った。市民を四つのトリブス区に配分し、後には平民に穀物を支給した。また度量衡、及びケントゥリア区の財産等級を定めた。彼はラティウム諸市の人々に対し、エペソスのディアナ神殿を建てた人々の例に倣って彼ら自身もディアナ神殿をアウエンティヌス丘に建立するよう説得した。そして神殿が完成した時、一人のラティニ人の処に目を見張るほど巨大な雌牛が生まれ、夢でこのような託宣が告げられた — この雌牛を²⁰犠牲に捧げた市民の属する国は、最大の帝国を手にするだろう、と。そこでこのラティニ人は雌牛をアウエンティヌス丘に引いて行き、ローマ人の祭司に事情を説明した。すると祭司は、汝はまず先に清流で手を清めなければならぬ、と抜け目なく告げた。そしてラティニ人がティベリス川に降りて行っている隙に、この祭司は雌牛を犠牲に捧げてしまった。かようにして彼は、ローマ市民のためには帝国を、自分自身のためには名声を、この賢明な行動で得ようとしたのであった。

セルウィウス・トゥリウスには気性の荒い娘が一人、穏やかな娘が一人いた。彼はタルクイニウスの息子たちもこれと似た性格であることを知り、全員の心を気質の違いで和らげようと、気性の荒い娘は穏やかな方の息子に、穏やかな娘は荒い方の息子に嫁がせた。ところが穏やかな方の二人は、偶然かまたはまた計略によってか死んでしまい、気質の相似が気の荒い二人を結びつけることになった。たちまちタルクイニウス・スペルプスはトゥリアにそそのかされ、元老院を召集して父祖伝来の王位を返還するよう求め始めた。これを聞きつけたセルウィウスは急いで元老院へと向かったが、その途中でタルクイニウスの命により階段から投げ落とされ、屋敷に逃げ帰ろうとするところを弑された。すぐさまトゥリアは広場へと駆けつけると、誰よりも最初に夫に対して王への敬意を表した。彼女は夫に混乱から退去するよう命ぜられたが、屋敷に戻る途中で父親の屍体を目にすると、それを避けようとした御者に、そのまま屍体を馬車で轢くよう指示した。ここからその地区は「穢れの区」と呼ばれることになった。だが後にトゥリアは夫と共に追放された。

- 8 **タルクイニウス・スペルプス**（「驕慢王」）は、その気質からこの添え名を得た。彼はセルウィウス・トゥリウスを弑し、非合法に王位を獲得した。けれども戦争には精力的で、ラティニ人とサピニ人を征服し、エトルリア人からはスエッサ・ポメティアの町を奪い、寝返りを装った息子セクストゥスの働きでガビイ市も勢力下に収めた。また彼はラテン祭を催した最初の人物であった。競技場には池を張り²¹、更に^{クローカ・マクシマ}天下水溝を建設したが、そのために全市民の力を動員したため、ここからこれは「市民の溝」と呼ばれることになった。カピトリウム^{クイリテウム}神殿建立に着手した際には、人間の^{カプト}首を発見し、それゆえこの町は世界の^{カプト}首都となる定めにあると判明した。だが

²⁰ *Sher.* bovem illam 「この雌牛を」 *Pichl.* bovem illam Dianae 「この雌牛をディアナに」

²¹ *Sher.* Lacus in circo...fecit 「競技場には池を張り」 *Pichl.* Ludos in circo...fecit 「競技場では競技際を催し」

アルデア攻城戦のおりに自分の息子がルクレティアを強姦したことから、息子と共に追放され、エトルリア王ボルセンナの元へと難を逃れた。そしてボルセンナの助力を得て王位を守ろうと試みたが、撃退されてクマエに退き、そこで人生の残りの時を最大の屈辱のうちに過ごしたのであった。

- 9 **タルクイニウス・コラティヌス**はタルクイニウス驕慢王の妹に生まれた。アルデア戦のおり、彼は王族の若者たちの天幕にいた。そこでたまたま開かれた無礼講の宴席で、全員が各々に自分の妻を褒め称え始め、ではそれを証明してみようということに話が決まった。そこで馬を駆ってローマに向かったところ、彼らが目の当たりにしたのは、王族の嫁連中が宴会やら放蕩²²に興じている姿だった。続いて彼らはコラティア市へと向かった。するとルクレティアが下女に混じって毛織を織っているところに出くわした。かくして、彼女が最も貞節な婦人である、との判定になった。その彼女を誘惑しようと、タルクイニウス・セクストゥスは夜になってコラティアに戻り、近親者の特権でコラティヌスの屋敷に入ると、ルクレティアの寝室に押し入り、その貞節を奪ってしまった。翌日彼女は父と夫を呼び、事の次第を明かすと、服に忍ばせていた短剣で自らの命を絶った。彼らは王族を破滅させる誓いを立て、その追放をもってルクレティアの死に復讐した。
- 10 **ユニウス・ブルトゥス**はタルクイニウス驕慢王の妹に生まれた。彼の兄はその財産と思慮のせいで伯父に殺される憂き目を見たが、彼は兄と同じ運命を辿るのを怖れていたため、愚鈍を装い、そこから「愚か者」と呼ばれることになった。王族の若者たちがデルポイへ向かう際には、物笑いの種に²³彼らに同行することを許され、ニフトコの笏に流し込まれた黄金を神への供物として携えた。そして母親に最初に接吻した者はローマで最大の支配権を手にするだろう、との託宣が告げられた時、ブルトゥスは大地に接吻した。その後ルクレティアが強姦されたため、彼はトリキピティヌスとコラティヌスと共に王族を破滅させる誓いを立てた。そして王族を追放して最初の執政官に選出されたが、自分の息子らがアクイリウス家とウィテリウス家の兄弟と共謀してマイルクイニウス王家をローマ市に呼び戻そうと企てたため、彼らを笞打ちに処し、斧で斬首した。その後王家に対して行った戦闘で、彼はタルクイニウスの子アルヌスとの一騎打ちの勝負に臨んだが、両者互いに打ち合って共倒れとなった。ブルトゥスの亡骸は広場に安置され、同僚執政が弔辞を送った後、女たちは一年の喪に服した。
- 11 エトルリア王ボルセンナがタルクイニウス王家をローマ市に復帰させようと試み、最初の攻撃でヤニクルム丘を占領した際、**ホラティウス・コクレス**（「独眼」）は — その添え名だったのは、彼が別の戦いで片目を失っていたためである — ティベリス川に架る木橋の前に立ちほだかり、背後の橋が打ち壊されるまで敵の軍勢を押し留めた²⁴。彼は橋と共にティベリス川に落ちた

²² *Sher.* convivio vel luxu 「宴会やら放蕩に」 *Pichl.* convivio et luxu 「豪華な宴会に」

²³ *Sher.* ridiculi gratia 「物笑いの種に」 *Pichl.* deridiculi gratia 「嘲りの的に」

²⁴ *Sher.* sustinuit 「押し留めた」 *Pichl.* solus sustinuit 「一人で押し留めた」

が、武具をつけたまま自軍の元まで泳ぎ切った。これらの功績により²⁵、彼には一日で耕せる²⁶だけの地所が国により与えられた。またウルカヌス神殿には彼の彫像も置かれた。

12 ポルセンナが²⁷ローマ市を攻囲していた際、ローマ人らしい屈強さの持ち主**ムキウス・コルドゥス**は元老院に赴いて寝返りの許可を求め、代わりに王の暗殺を約束した。その許可を得ると、彼はポルセンナの陣営に向かったが、そこで王と見誤って侍従を殺してしまった。取り押えられ王の元に連行されると、彼は右手を祭壇の火にくべ、この手が誤って人を殺めたのだから、罪を犯した手にはかような罰を与えるのだ、と言った。王の憐憫により祭壇から引き離されると、彼はあたかもその恩恵に報いるが如く、我ら三百人が等しく貴方を仕留める誓いを立てておりますぞ、と告げた。これに怖れをなした王は、人質を受け取ることで戦争を放棄した。ムキウスにはティベリス川の向こう側の草地が与えられ、そこからここは「ムキウスの草地」と呼ばれることになった。またその名誉を称えて彼の彫像も建てられた。

13 ポルセンナは人質の一人として貴族の娘**クロエリア**を受け取ったが、彼女は門番を欺くと、夜に紛れ王の陣営を抜け出し、たまたま巡り合わせた馬を奪ってティベリス川を渡った。だがポルセンナが使節を送って返還を要求したため、彼女は連れ戻された。王はこの娘の勇氣に感嘆し、彼女の選んだ人質とともに祖国への帰還を許した。そこでクロエリアは実に無垢な少年たちを²⁸選んだのであるが、それは年若い彼らが辱めの的となり易いことを知っていたからである。広場には彼女の騎馬像が置かれた。

14 ローマがウェイ市と戦争を行っていた時、**ファビウス家の一門**は、ウェイ人は我が一族の敵である、と私人の立場で主張し、三百六人が執政官ファビウスの指揮下に出陣した。彼らは幾度も勝利を重ねた後、クレメラ川の河畔に陣を張った。そこでウェイ人は謀り事に訴えかけ、四方から家畜の群れを彼らの視界に入るよう放った。そして進み出てきた²⁹ファビウス一門は伏兵の罠にはまり、一人残らず殺されて最期を遂げた。この事件の起きた日は凶日の一つに数えられることになり、彼らの出陣した門は「穢れの門」と呼ばれるようになった。だが若年のために家に残されていたファビウス氏の唯一の生き残りが一族の血筋を守り、それはハンニバルを延滞戦術で消耗させ、政敵からは「^{ククククトル}遅延者」と呼ばれたクイントゥス・ファビウス・マクシムスまで続いた。

15 ウォレススの子**ルキウス・ヴァレリウス**は、最初に対ウェイ人戦勝の、二度目に対サビニ人戦勝の、三度目には両者に対する戦勝の凱旋式を挙げた。彼は同僚執政のトリキピティヌスに代わる執政官の選出を行わず、おまけにウェリア丘で一番守りの固い場所に居を構えていたため、

²⁵ *Sher.* ob haec 「これらの功績により」 *Pichl.* ob hoc 「この功績により」

²⁶ *Sher.* arari potuisset 「耕せる」 *Pichl.* ambire <vomere> potuisset 「(鋤で) 廻れる」

²⁷ *Sher.* Porsenna 「ポルセンナが」 *Pichl.* Posenna rex 「ポルセンナ王が」

²⁸ *Sher.* virgines pueros quidem 「実に無垢な少年たちを」 *Pichl.* virgines puerosque 「生娘と少年たちを」

²⁹ *Sher.* in conspectu eorum protulerunt. Atque... 「彼らの視界に入るよう放った。そして…」 *Pichl.* in conspectu illorum protulerunt, ad quae... 「彼らの視界に入るよう放ち、そこに…」

王位を狙っているとの嫌疑をかけられることになった。彼はこれを知ると、市民が自分に対してそのような怖れを抱いていたことに民会で不服を申し立て、自分の屋敷を破壊するよう人を差し向けた。加えて東^{フラスケス} 梶から斧を取り除き、民会では東梶を下に降ろした。また彼は、行政官職権に対する上訴権を認める法案を民会に提出した。このゆえに彼は「民衆の友」^{アフリコラ}と呼ばれた。彼が没した時、その死は国葬をもって弔われ、また女たちが一年の喪に服する榮譽を受けた。

16 タルクイニウスは追放された後、自分の嫁婿であるトゥスクルムのマミリウスの元に難を逃れた。そしてラティウムをけしかけてローマを激しく攻めて来たため、**アウルス・ポストゥミウス**が独裁官に任命され、レギルス湖畔で敵と戦を交えた。勝敗の行方がどちらともつかずにいた時、独裁官副官は、馬を容赦無い勢いで駆れるよう馬勒を外せ、と命じた。これによりローマ軍はラティニ人の軍勢を敗走させ、またその陣営を占領した。ところがローマ軍の中に、二人の若者が輝く白馬に跨り、傑出した武勇を振るう様が見られた。そこで独裁官は相応しい褒賞を与えようと二人を捜し求めたが、二度と見つけることはできなかった。二人がカストルとポルクス神だと考えた彼は、二神併せた銘を添えて献堂した。

17 **ルキウス・クインクティウス・キンキンナトゥス**（縮れ毛）は、息子のカエソが至極手に負えぬ性格であったためこれを勘当したところ、息子は監察官からも譴責を受けてウォルスキ人とサビニ人の元に逃亡してしまつた。そして両部族はクロエリウス・グラックスの指揮下にローマに戦争を仕掛け、アルギドゥス山で執政官クイントゥス・ミヌキウスを攻囲した³⁰。そこでクインクティウスが独裁官に任命され、彼の処に使節が派遣されたが、使節が目当たりしたのは、肌を曝しティベリス川の向こうで畑を耕す彼の姿であった。彼は独裁官の記章を身につけるや、執政官を包圍陣から救い出した。この功績により、彼はミヌキウスと彼の軍から金の「^{コロナ・オブシディオナリス}攻 囲 冠」を贈られた。そして敵に勝利し、敵軍の指揮官の降伏を受け容れ、凱旋式の日に凱旋戦車の前を連行した。だが十六日目には自身の受けた独裁官の職を辞し、畑を耕しに戻った。二十年後に再び独裁官に任命された時には、専制を狙っていたスプリウス・マエリウスの処刑を独裁官副官セルウィリウス・アハラに命じ、マエリウスの屋敷を取り壊し更地にした。ここから、その場所は「^{アエクイメリウム}マエリウスの更地」と呼ばれている。

18 「^{ラナトウッサ}毛むくじゃら」の添え名を持つ**メネニウス・アグリッパ**は対サビニ戦の指揮官に選ばれ、彼らに対する戦勝の凱旋式を挙げた。また市民が徴税と兵役に苦しめられていると訴え、元老院に反抗して町から退去し、彼ら呼び戻すのも叶わなかった時には、アグリッパは彼らに向かってこう語った。「昔、人間の手足は胃が暇そうにしているのを見て胃に反乱を起し、彼に奉仕するのを拒んだ。かくして手足自身もまた衰弱してしまったため、手足は胃が受け取った食物をすべての部分に分け与えているのだと悟り、胃と和解したのである。かように元老院と市民もひとつの体であるかの如く、不和によって滅び、協和によって栄えるのである。」この寓話のおかげで

³⁰ *Sher. obsidebant* 「攻囲した」 *Pichl. cum exercitu obsidebant* 「軍を率いて攻囲した」

市民は帰還した。だが彼らは貴族に対して³¹自分たちの自由を護らせるべく、平民護民官を選出した。一方メネウスはあまりの極貧の中で逝去したため、市民がクアドランス銅貨を寄付して彼を埋葬し、元老院が国費でその墓地を提供することになった。

19 **グナエウス・マルキウス**は、ウォルスキ人の町コリオリを攻略したため「^{コリオリの征服者}」と呼ばれた。この格別の功績³²に対してポストゥミウスから好きな褒賞を選ぶ榮譽を受けたおり、彼は馬一頭と彼をもてなしてくれた人物だけを取り、武勇と忠義の模範となった。彼は執政官であった時、食料価格の高騰に際してシチリアから輸入した穀物を高額で市民に売りつけようと計らった。それはこの不当な行為によって平民が田畑に精を出し、反乱に精を出さぬようにするためであった。だがその結果平民護民官デキウスに告発される羽目になり、ウォルスキ人の元へと身を退いた。そしてティトゥス・タティウスの指揮下にローマを攻めるよう彼らをけしかけ、ローマ市から四里の処に陣営を張った。市民から成る使節団をいくら送ろうとも彼は説き伏せられなかったが、母のウェトゥリアと妻のウォルムニアが婦人の一団に付き添われて来ると、彼の心は動かされた。そして彼は戦争を放棄したため、裏切り者として殺されてしまった。その場所には「婦人の幸運」の女神のための神殿が建立された。

20 **ファビウス・アンブストゥス**は二人の娘のうち、一人を平民の**リキニウス・ストロ**に、もう一人をパトリキ貴族の**スルピキウス**に³³妻として娶らせた。平民に嫁いだ方の娘が姉の元を訪れた時のこと、姉の夫は執政官権限を有する軍団指揮官であったため、従者の**東 桿**^{ファステス}が戸口近くに置かれていた。これに妹は見苦しく狼狽してしまった。姉に笑われた彼女は、夫に不平を述べた。そこで彼は義父の支援を受け平民護民官職に就任するや、執政官の一人は平民から選出すべし、とする法案をすぐさま提出した。法はアッピウス・クラウディウスの反対を受けたものの、可決し、リキニウス・ストロは執政官に選ばれた最初の例となった。同様に彼は、如何なる平民も³⁴百ユゲラ³⁵を越える土地を有してはならぬ、と法によって規定した。ところが彼自身が百五十ユゲラ³⁶の土地を持っていた上に、我が子を父権から解放してその名義で更に同ユゲラを所有していたため、裁判にかけられ、自分の法の下で罰せられたあらゆる最初の例ともなった。

21 ローマ市民は争いを続ける行政官たちに耐えきれなくなったため、法制定のための**十人委員会**を選出した。委員会はソロンの法典から法を書き写し、それらを十二の板に記して発布した。だが彼らが独裁を狙って協定を結び、自らの行政官職の任期を延長しようとしていたその時、委員の一人アッピウス・クラウディウスが、アルギドゥス山で軍務に就いていた百人隊長ウィルギニ

³¹ *Sher.* adversum nobilitatem 「貴族に対して」 *Pichl.* adversum nobilitatis superbiam 「貴族の傲慢に
対して」

³² *Sher.* facinora 「功績」 *Pichl.* militiae facinora 「軍功」

³³ *Sher.* Sulpicio 「スルピキウスに」 *Pichl.* Aulo Sulpicio 「アウルス・スルピキウスに」

³⁴ *Sher.* ne qui plebeio 「如何なる平民も」 *Pichl.* ne qui 「何びとも」

³⁵ *Sher.* centum iugera 「百ユゲラ」 *Pichl.* quingenta iugera 「五百ユゲラ」

³⁶ *Sher.* iugera quinquaginta centum 「百五十ユゲラ」 *Pichl.* iugera quingenta 「五百ユゲラ」

ウスの娘ウィルギニアに恋情を抱いた。だが彼は娘を誘惑できなかつたため、手先を雇い、彼女を奴隷として要求させることにした。もっとも彼自身が告発者でもあり判事でもあったので、勝訴は容易そうであった。これを知った父親は、裁判の行われるその同じ日に到着したが、既に娘に債務奴隷の裁定が下されていたのを知ると、彼女と最後の面会をする機会を得、密かに彼女を連れ去った後に殺してしまった³⁷。そして彼女の亡骸を肩に³⁸担いで自軍の元に走り、この犯罪に復讐せよ、と兵士らを焚きつけた。そこで兵士らは十人の護民官を選出してアウェンティヌスの丘を占領すると、十人委員会に対し彼らの行政官職を辞任するよう命じ³⁹、更に委員全員を死刑もしくは追放刑によって罰した。アッピウス・クラウディウスは牢獄で殺された。

22 ローマは疫病に際し、託宣の流布により⁴⁰エピダウロスから**アエスクラピウス神**を召喚するため、クイントゥス・オグルニウスを長とする十人の使節団を派遣した。使節が彼の地に辿り着き、巨大な神像に驚きの声を上げていると、大蛇がその台座から這い出してきた。だがそれは神々しく、恐ろしいものではなかつた。大蛇は一同の驚嘆する中町の中心を通り、ローマの船に乗り込むと、オグルニウスの天幕の中でとぐろを巻いた。この御神体を運んだ使節団がアンティウムに入港すると、ここで海の風ぐ間に大蛇は近くのアエスクラピウスの聖域に向かい、数日を経てまた船に戻った。そしてティベリス川を上って運搬する途上、大蛇が付近の島に乗り移ったので、この島には神のための神殿が建立された。すると疫病は驚くべき速さで鎮まったのである。

23 **フリウス・カミルス**がファリスキ人を攻囲していた際、初等学校の教師が有力者層の子息を引き渡しに来た。だがカミルスは彼を縛り上げ、町に連れ帰らせるべく⁴¹その同じ子供たちに引き渡した。彼のこれほどの公正さのゆえに、たちまちファリスキ人は降伏した。彼は冬季の攻城戦でウェイイ市を征服し、その戦勝の凱旋式を挙げた。だがしばらくの後、凱旋式の時に白馬を率い、おまけに戦利品の分配も公平でなかつたと非難を受けた。そして平民護民官アブレウス・サトゥルニヌスによって告発され、断罪されてアルデアに退いた。その後、ガリア人のセノネス族がその不毛さゆえに自らの土地を捨て、イタリアの町クルシウムを攻囲した時、ローマからはファビウス家の三人がガリア人に攻撃を控えるよう警告すべく派遣された。だがファビウス家の一人は国際法に反して戦闘状態に入り、セノネス族の族長を殺してしまった。これに激昂したガリア人は使節の引渡しを要求したが叶わず、そこでローマへと向かい、ローマ軍をアリア川で殲滅した。これは七月十七日のことだった。そこでこの日は凶日の一つに数えられることとなり、「アリアの日」と呼ばれた。勝者としてローマ市に入城したガリア人は、市内で高官椅子に座し官職の記章を身につけた最高位の貴族の老人たちを、これは神々であるとして最初は敬ったが、

³⁷ *Sher. cum ... abduxisset, occidit* 「連れ去った後に殺してしまった」 *Pichl. abduxit et occidit* 「連れ去り殺してしまった」

³⁸ *Sher. humero* 「肩に」 *Pichl. humeris* 「両肩に」

³⁹ *Sher. praeceperunt* 「命じ」 *Pichl. coegerunt* 「強要し」

⁴⁰ *Sher. responso manante* 「託宣の流布により」 *Pichl. responso monente* 「託宣の啓示により」

⁴¹ *Sher. redigendum* 「連れ帰らせるべく」 *Pichl. redigendum et verberandum* 「連れ帰って鞭打ちに処させるべく」

次にはこれは人間であると蔑み、殺してしまった。残った若者たちはマンリウスと共にカピトリウム丘に逃れ、そこで攻囲を受けたが、カミルスの武勇に救われることになった。彼は不在のまま独裁官に任命されると、残存兵を集めてガリア人の不意をつき、皆殺しにした。そしてウェイイ市への移住を望んでいたローマ市民を引き留めた。かくして彼は、市民には町を還し、同時に町には市民を帰したのであった。

- 24 カピトリウムを守り抜いた功績で「カピトリヌス」と呼ばれたマンリウスは、十六歳の時に自ら志願兵として名乗り出た。軍功により彼の上官から三十七の褒賞を受け、その体には二十三の戦傷があった。ローマ市が攻略された時、カピトリウムへの避難を提唱したのは彼であった。ある夜、雁の鳴く声で目を覚まし、丘を登って来ていたガリア軍を投げ落としした。彼は市民から「守護者」と呼ばれ、穀物を贈られ、加えて国費でカピトリウムに屋敷さえ受けた。このため傲慢心で不遜になった彼は、ガリア人の財宝を隠蔽したと元老院に非難され、更に債務奴隷に落とされた負債者を自分の資産で解放しようとしたため、王位を狙った咎で⁴²投獄されたが、市民の団結のおかげで釈放された。彼は同じ過ちをより深刻に犯し続けたため、再び起訴された。だがカピトリウムが目に入る場所だったことから、その判決は先送りにされた。そして今度は別の場所で断罪され、彼はタルペイアの崖から投げ落とされた。またその家屋敷は破壊され、財産は没収された。彼の一族は、マンリウスの添え名に誓って⁴³後代の誰も「カピトリヌス」と呼ばれてはならぬ、と定めた。
- 25 ローマの信望を敵視していた⁴⁴フィデナエ市は、恩赦の望みを断ってより決然と戦おうと考え、市に派遣された使節を殺害した。そこでフィデナエに対してクインクティウス・キンキンナトゥスが独裁官として派遣され、彼の副官であったコルネリウス・コッススは、自らの手で敵将ラルス・トルムニウスを倒した。この戦勝のゆえに、彼はロムルスに次いで「見事な戦利品」をユピテル・フェレトリウス神に奉獻した二人目の人物となった。
- 26 プブリウス・デキウス・ムスは、サムニテス戦争の時に執政官ウァレリウス・マクシムスとコルネリウス・コッスス麾下の軍団指揮官となった。彼は自軍がガウルス山の隘路で敵の伏兵に包囲された際、要請していた援軍を手に入れると高所に登り、敵軍を威嚇した。そして自身は真夜中になって、睡魔に負けた歩哨の真っ只中を抜けて無傷で逃げおおせた。彼はこの功績により自軍から「市民冠」^{コロナ・キウィカ}を贈られた。ラテン戦争の時にはマンリウス・トルクアトゥスを同僚執政として執政官になり、ウェセリス川の河畔に陣を張った。そのおり、両執政官が共に、勝利を収めるのは指揮官が戦闘中に倒れた方の軍となろう、という夢を見る出来事があった。そこで二人は夢について互いの同僚と話し合い、戦場で苦戦を強いられた^{よく}翼を指揮していた方が冥府の神々

⁴² *Sher.* regni affectati 「王位を狙った咎で」 *Pichl.* regni affectati suspectus 「王位を狙った嫌疑を受け」

⁴³ *Sher.* Manlii cognomie iuravit ne quis...vocaretur 「マンリウスの添え名に誓って…呼ばれてはならぬと定めた」 *Pichl.* Manlii cognomen eiuravit 「マンリウスの添え名を棄てる誓いを立てた」

⁴⁴ *Sher.* fidei Romanorum hostes 「ローマの信望を敵視していた」 *Pichl.* veteres Romanorum hostes 「ローマの旧敵であった」

にその身を捧げることにしよう、と取り決めた。そこでデキウスは自身の師団が後退しつつあった時、神祇官ウァレリウスの手を借りて我が身と敵軍を冥府の神々に捧げる誓いを立てた。そして敵軍の中に突撃し、自軍に勝利を遺した。

27 デキウスの息子**プブリウス・デキウス**は最初に執政官になった時、サムニテス人に対する戦勝の凱旋式を挙げ、彼らから奪った戦利品をケレス神に奉獻した。二期目と三期目に執政官になった時には内政と軍事において多くの業績を成し遂げた。ファビウス・マクシムスを同僚として四期目の執政官職に就いた時、ガリア人、サムニテス人、ウンブリア人、そしてエトルリア人が反ローマの共同戦線を張ったのを受け、彼は戦場に軍を率いていった。そして彼の翼が後退しつつあった時、父の例に倣い、神祇官マルクス・リウィウスに助言を求めると、槍を踏みつつその祈祷の言葉を復唱し、我が身と敵軍を冥府の神々に捧げる誓いを立てた。そして敵軍の中に突撃し、自軍に勝利を遺した。彼の亡骸は同僚執政が弔辞を送った後、壮麗な埋葬を受けた。

28 **ティトゥス・マンリウス・トルクアトゥス**はその愚鈍さと呂律の鈍さのせいで、父親により田舎に隠居させられたが、その父が平民護民官ポンポニウスに告発されたと聞きつけると、夜道をローマへと向かった。そして内密に面会する機会を護民官から得ると、剣を引き抜き、護民官を大いに震え上がらせ告発を取り下げるよう強いた。独裁官スルピキウスの下で軍団指揮官となった時には、戦いを挑んできたガリア人を倒し、彼から^{トルクエス}首飾りを剥ぎ取って自分の首にかけた。ラテン戦争の時には執政官として、我が子を命令に背いて戦ったとの咎で斧で斬首した。そしてウェセリス川の河畔で、同僚執政デキウスの自己犠牲によってラティニ軍を撃破した。彼は執政官職を辞退したが、それは彼自身が市民の過ちに耐え切れず、市民も彼の厳格さに絶え切れないからである、と彼は言った。

29 カミルスはセノネス族の残党を追撃した。巨躯のガリア人が戦いを挑んで来た時、皆が恐れをなす中で、軍団指揮官の**ウァレリウス**唯一人が彼に対して進み出た。すると一羽の鳥が日の昇る方角から来て彼の兜に舞い降り、決闘の最中にガリア人の顔と目を衝いた⁴⁵。ウァレリウスは敵に勝利し、「^{コルウイヌス}鳥人」と呼ばれた。彼は⁴⁶負債に苦しめられていた大勢の群集がカプア市を占領しようと試み、無理を強いてクインクティウスを自分たちの指揮官に仕立て上げた際、負債を帳消しにして反乱を鎮めた。

30 **ガイウス**⁴⁷・ウェトゥリウスと**スプリウス・ポストゥミウス**は執政官として対サムニテス戦を遂行したが、その最中に敵軍の将**ポンティウス・テレシヌス**によって伏兵の罠へとおびき寄せられた。というのもポンティウスは、脱走兵を装った部下を送り、アプリアのルケリア市がサムニテス軍の攻囲を受けている、とローマ軍に告げさせたのである。だがルケリアに行くには二つ

⁴⁵ *Sher.* verberavit 「衝いた」 *Pichl.* everberavit 「強く衝いた」

⁴⁶ *Sher.* hic 「彼は」 *Pichl.* hinc 「この後」

⁴⁷ *Sher.* Gaius 「ガイウス」 *Pichl.* Titus 「ティトゥス」

の経路があり、一方は遠回りだが安全な道、もう一方は急ぐ者には⁴⁸近道だが危険な道であった。かくしてポンティウスは伏兵を仕掛け – その場所はカウディナエ隘路と呼ばれている – 父親のヘレンニウスを呼ぶと、さてどうするのが良からう、と尋ねた。すると父は、軍事力を削ぐために皆殺しにするか、貸しを作るために全員解放するか、いずれかにすべし、と言った。ポンティウスはどちらの提案も却下し、条約を提案して⁴⁹全員を頸木の下へと送った。だがこの条約はローマ市民に拒絶され⁵⁰、ポストゥミウスはサミニテス人に引き渡されたが、受け容れられなかった。

31 **ルキウス・パピリウス**はその駿足さゆえに「^{クルソル}飛脚」と呼ばれた。彼は予兆が不吉であったにも関わらず、執政官として自分が対サムニテス戦に出陣してしまったと悟ると、卜占をやり直すべくローマへと戻った。そしてファビウス・ルルスに軍を委ねる際、敵と戦を交えてはならぬ、と彼に命じた。ところがファビウスは機運に任せて戦闘を行ってしまった。そこで帰還した彼は⁵¹、ファビウスを斧で処刑しようとした。ファビウスはローマ市に難を逃れたものの、護民官らはこの嘆願者を守ろうとしなかった。そこで父親は涙によって、市民は請願によって、彼の恩赦を得た。パピリウスはサムニテス人に対する戦勝の凱旋式を挙げた。彼はまたプラエネステ市で国務官を⁵²厳しく譴責したおり、従者にこう告げた。「斧を用意せよ。」だが国務官が死の恐怖で茫然自失になるの見届けると、彼は通行の妨げになっていた木の根を切り払うよう命じた。

32 **クイントゥス・ファビウス・ルルス**は、その武勇ゆえに彼の家系で「^{マクシムス}最も偉大なる者」と呼ばれた最初の人物であった。彼は独裁官副官であった時にパピリウスの手で⁵³危うく斧で斬首されかけた後、最初に対アプリア人及び対ヌケリア人戦勝の、次には対サムニテス人戦勝の、三度目には対ガリア人、ウンブリア人、マルシ人、そしてエトルリア人戦勝の凱旋式を挙げた。監察官になった時には解放奴隷をトリブス区から排斥した。だが彼は、同一人物がかくも頻繁に監察官になるのは共和政の慣習に適うものではない、と言って、監察官を二期務めるのを拒んだ。ローマ騎士が六月十五日に名誉の神殿からカピトリウム神殿まで騎馬姿で行進するという制度を最初に定めたのも彼であった。その死に際しては、彼のために多額の寄贈金が市民の厚意により寄せられた。その金額は彼の息子がそれを元手に公に肉を配給し、御馳走を⁵⁴振舞えるほどであった。

33 **マルクス・クリウス・デントゥス**（「鬼子」）は最初にサムニテス人を上の海（アドリア海）

⁴⁸ *Sher. festinanti* 「急ぐ者には」 *Pichl. Festinatio brevius eligit* 「緊急事態が近道を選ばせた」

⁴⁹ *Sher. acto* 「提案して」 *Pichl. icto* 「結んで」

⁵⁰ *Sher. improbatum est* 「拒絶され」 *Pichl. postea improbatum est* 「後に拒絶され」

⁵¹ *Sher. reversus* 「帰還した彼は」 *Pichl. reversus Papirius* 「帰還したパピリウスは」

⁵² *Sher. Praenesti ... praetorem* 「プラエネステ市で国務官を」 *Pichl. Praenestinum praetorem* 「プラエネステ市の国務官を」

⁵³ *Sher. a Papirio* 「パピリウスの手で」 *Pichl. a Papirio ob Samnitum victoriam* 「サムニテス戦での勝利のゆえにパピリウスの手で」

⁵⁴ *Sher. epulas* 「御馳走を」 *Pichl. epulum* 「晩餐を」

に至るまで平定し、彼らに対する戦勝の凱旋式を挙げた。帰還した時、彼は民会でこう言上した。「我はかくも広大な土地を手に入れた。ゆえに、もし我がかくも多くの人間を捕えていなければ、これらは荒地となっていたであろう。加えて、我はかくも多くの人間を捕えた。ゆえに、もし我がかくも広大な土地を手に入れていなければ、これらは餓死していたであろう。」彼は二度目にはサビニ人に対する戦勝の凱旋式を挙げ、三度目にはルカニア人に対する戦勝のオウァティオ凱旋式を挙げてローマ市に入城した。またエペイロスのピュロスをイタリアから放逐した。彼は各々四十ユグラの土地を個々の市民に分配すると、続いて自身にも（同量を）定め⁵⁵、この広さの土地では不充分だなどという者があつてはならぬ、と言った。彼が炉で蕪を炒っていたところに、サムニテス人の使節が金塊を贈ろうとした時には、「儂はこいつを儂の土鍋で喰いながら、金塊を持つ連中に指図している方が性に合つとる⁵⁶。」公金を横領したとの咎で非難された時には、彼が供儀に使うのを常としていた木製の壺⁵⁷を中央に運ぶと、誓いを立て、自分は敵から奪った戦利品の中でこれ以外は何ひとつ我が家に持ち帰ってなどおらぬ、と宣言した。その後、敵からの掠奪品を売却して得た金を充て、アニオ川の水流を⁵⁸ローマ市内に引き入れた。平民護民官になった時には、平民出身の行政官を選出する民会を認可するよう元老院に強いた。これらの功績により、彼にはティファタ河畔の屋敷と五百ユグラの土地が国費で与えられた。

- 34 **アッピウス・クラウディウス・カエクス**（「盲目」）は監察官の職にあつた時、解放奴隷すら元老院に選出した。だが笛吹きからは公の場で晩餐に列席し演奏する権利を剥奪した。ヘルクレスのための供儀には二つの家系、すなわちポティティイ家とピナリイ家⁵⁹が任ぜられていたが、彼は賄賂を使ってポティティイ家出身のヘルクレスの祭司を買収し、ヘルクラネウムの⁶⁰秘儀を国有奴隷に明かすよう仕向けた。このため彼は盲目にされ、ポティティイ家の一族は完全に途絶えてしまった。だが彼は、執政官職を平民と共有することには誰よりも猛烈に抵抗し、ファビウス唯一人を戦争に派遣することにも反対した。戦争ではサビニ人、サムニテス人、エトルリア人を征服した。彼がブルンディシウムまで至る道を石で舗装したことから、かの道は「アッピア街道」と呼ばれている。また彼はアニオ川の水流をローマ市内に引き入れた。監察官の職に五年間就いたのは、あらゆる者のうちで彼唯一人であつた。ピュロスとの和平について協議が開かれ、使節キネアスの賄賂で有力者たちの情実が買われんとしていた時には、彼は年老いて盲目であつたにも関わらず、興で元老院に担ぎ込まれると、堂々たる演説を打ってこの極めて不名誉な和平案を撥ね退けたのであつた。

⁵⁵ *Sher. sibi deinde constituit* 「そして自身にも定め」 *Pichl. sibi deinde totidem constituit* 「そして自身にも同量を定め」

⁵⁶ *Sher. hoc* 「こいつを」 *Pichl. inquit, haec* 「こいつらを…と言った」

⁵⁷ *Sher. cadum* 「壺」 *Pichl. gutum* 「瓶」

⁵⁸ *Sher. aquam deinde Anienem* 「その後…アニオ川の水流を」 *Pichl. aquam Anienem* 「アニオ川の水流を」

⁵⁹ *Sher. scilicet Potitiorum et Pinariorum* 「すなわちポティティイ家とピナリイ家」 *Pichl. Potitiorum et Pinariorum* 「ポティティイ家とピナリイ家」

⁶⁰ *Sher. Herculeana* 「ヘルクラネウムの」 *Pichl. Herculea* 「ヘルクレスの」

35 エペイロスの王ピュロスは、母方がアキレウスの血を、父方がヘルクレスの血を引いていた。彼は世界の支配権を得ようとしており、そこでローマが強敵であると考えたので、戦の見込みについてアポロン神に伺いを立てることにした。神の返答は曖昧なものだった。「アイアコスの後裔に告げる、汝はローマ人を破ることができよう。」(または「汝をローマ人は破ることができよう。»)これを都合の良い方に解した彼は、タレントゥム市の⁶¹支援を請け負ってローマに戦争を仕掛けた。そしてヘラクレアでは象という新兵器を用いて執政官ラエウィヌスを混乱に陥れた。だがローマ兵が真正面に傷を受けて倒れているのを目にすると、こう言った。「かような兵たちがおれば、余は瞬間に世界を征服できたであろうに。」喜びに沸く友人たちには、こう告げた。「かかる勝利が余にとって何だというのか？自軍の精鋭を失ってしまうような勝利が。」彼はローマ市から二十里の処に陣を張ると、ファブリキウスに無償で捕虜を返還した。だがラエウィヌスの軍を目にした時、ローマ軍と対峙する自分はヒュドラと対峙するヘルクレスと同じ状況にある、と口にした。彼はクリウスとファブリキウスに打ち負かされた後、タレントゥムに逃げ戻り、シチリアに渡った。まもなくイタリアのロクロイ市に戻ると、財宝を⁶²持ち去ろうと試みたが、その財宝は船の難破で流されて⁶³しまった。続いてギリシアに戻り、アルゴスを攻める最中、屋根瓦の一撃を受けて倒れ伏した。その亡骸はマケドニアの王アンティゴノスの元に返還され、壮麗な埋葬を受けた。

36 ウォルシニ市はエトルリアの名高い町であったが、無節制のせいで滅亡寸前にまで至った。というも彼らは不用意に奴隷を解放し、元老院に選出しているうちに⁶⁴、奴隷の⁶⁵共謀で制圧されてしまったからである。数多の侮辱に曝されたウォルシニ人は密かにローマの⁶⁶支援を求めた。そこでデキウス・ムスが派遣され、彼は全ての解放奴隷を或いは牢獄で処刑し、或いは奴隷の身分に戻して主人に返還した。

37 ウォルシニ市を破り、^{アウダクス}の添え名を持つ⁶⁷アッピウス・クラウディウスは、カエクスの弟であった。彼は執政官であった時、マメルティニ団を彼らの市砦に居座っていたカルタゴ軍とシュラクサ王ヒエロンから救出すべく派遣された。まず初めに彼は敵を偵察するため、漁船に乗って海峡(メッシナ海峡)を渡り、市砦から駐留軍を退くよう⁶⁸カルタゴ軍の指揮官を説得した。レギオン市に帰還すると、歩兵部隊を使って敵軍の五段櫓船を拿捕し、この船で一個軍団をシチリアに輸送した。彼はカルタゴ軍をメッサナ市から放逐した。シュラクサ市近郊の会戦では

⁶¹ *Sher.* Tarentinis 「タレントゥム市のための」 *Pichl.* Tarentinorum 「タレントゥム市の」

⁶² *Sher.* pecuniam 「財宝を」 *Pichl.* pecuniam Proserpinae 「ペルセポネの財宝を」

⁶³ *Sher.* elata 「流されて」 *Pichl.* relata 「戻されて」

⁶⁴ *Sher.* dum in curiam 「元老院に…うちに」 *Pichl.* dein in curiam 「そして元老院に」

⁶⁵ *Sher.* servorum 「奴隷の」 *Pichl.* eorum 「彼らの」

⁶⁶ *Sher.* Romae 「ローマの」 *Pichl.* a Roma 「ローマから」

⁶⁷ *Sher.* cognomento Audax 「^{アウダクス}の添え名を持つ」 *Pichl.* cognomento Caudex dictus 「^{カウダクス}の添え名で呼ばれた」

⁶⁸ *Sher.* duceret 「退くよう」 *Pichl.* deduceret 「撤退させるよう」

ヒエロンの降伏を受け容れ、この危難に怖れをなしたヒエロンはローマとの友好を求め、その後はローマの最も忠実な同盟者となった。

- 38 **グナエウス・ドゥイリウス**⁶⁹は第一次ポエニ戦争の時に対カルタゴ戦の指揮官として派遣された。海上ではカルタゴ軍が極めて優勢であると見た彼は、技巧を凝らすよりも寧ろ堅固な艦隊を建造し⁷⁰、更に敵軍の嘲笑を受けつつも初めて「鉄鉤」を作り上げた。そして彼が⁷¹戦闘の最中に敵艦を捕獲すると、敵艦は制圧され、拿捕された。カルタゴ艦隊の指揮官ヒミルコは逃走し、元老院にどうすべきか決議するよう求めた。全議員が戦闘せよと声高に叫ぶ中、ヒミルコはこう述べた。「戦った。そして敗れたのだ。」かくして彼は磔刑を逃れた。というのも、カルタゴ人の間では事を仕損じた指揮官は罰せられたからである。ドゥイリウスに対しては、公の晩餐から帰宅する際、松明に明かりを灯して笛吹きを伴うことが認められた。
- 39 **アティリウス・カラティヌス**は対カルタゴ戦の指揮官として派遣された時、ヘンナ⁷²、ドレパノン、リリュバイオンといった壮大且つ堅固な諸都市から敵の駐留軍を駆逐し、パノルモスを攻略した。そして全シチリアを席卷した後、僅かばかりの艦船を率いてハミルカル指揮下の敵の大艦隊を撃破した。けれども敵軍の攻囲を受けたカエキナへと⁷³急行する途上、彼はカルタゴ軍に隘路で包囲されてしまった。そこで軍団指揮官のカルプルニウス・フランマが三百人⁷⁴を手に入れると、高所に登り、執政官を救い出した。一方フランマ自身はこの三百人を率いて戦う最中に倒れた。だが後に⁷⁵瀕死の状態であティリウスに発見され、傷の癒えた後は、敵軍にとって大いなる恐怖的となった。アティリウスは華々しく凱旋式を挙げた。
- 40 **マルクス・アティリウス・レグルス**は、執政官であった時にサレンティニ人を破った功により凱旋式を挙げ、またローマの將軍としては初めてアフリカに艦隊を移送した。だがその艦隊が破壊された後、ハミルカルから戦艦三十七隻を受領した⁷⁶。彼は二百の町を攻略し、二十万の人間を捕虜にした。彼が不在の間、彼の妻と子達は貧窮していたため、その出費は国費でまかなわれた。その後スパルタ人傭兵のクサンティッポスの戦術により、彼は捕えられて牢獄に送られた。そして捕虜交換交渉の使節としてローマに送られたが、交渉が不成立であった場合にのみ戻る⁷⁷、と誓約していた。そして元老院で和平案に反対すると、妻と子を我が身から振り切って⁷⁸カルタ

⁶⁹ *Sher. Duillius* 「ドゥイリウス」 *Pichl. Duellius* 「ドゥエリウス」

⁷⁰ *Sher. classem magis validam quam fabre fecit* 「技巧を凝らすより寧ろ堅固な艦隊を建造し」 *Pichl. classem validam fabrefecit* 「堅固な艦隊を巧みに建造し」

⁷¹ *Sher. qui* 「そして彼は」 *Pichl. sic* 「かくして」

⁷² *Sher. Henna* 「ヘンナ」 *Pichl. Enna* 「エンナ」

⁷³ *Sher. ad Cecinam* 「カエキナへと」 *Pichl. ad Catinam* 「カタネへと」

⁷⁴ *Sher. trecentis* 「三百人」 *Pichl. trecentis sociis* 「三百人の同盟軍」

⁷⁵ *Sher. et postea* 「だが後に」 *Pichl. postea* 「後に」

⁷⁶ *Sher. accepit* 「受領した」 *Pichl. cepit* 「拿捕した」

⁷⁷ *Sher. si non impetrasset, ita demum rediret* 「交渉が不成立であった場合にのみ戻る」 *Pichl. si impetrasset, ita demum non rediret* 「交渉が成立した場合にのみ戻らぬ」

⁷⁸ *Sher. reiectisque a se* 「我が身から振り切って」 *Pichl. reiectisque ab amplexu* 「抱きつくの振り切

ゴに帰還した。そこで彼は木棺に投げ込まれ、内側に打ち込まれた釘で不眠と苦痛の罰を受けた。

41 クイントゥス・ルタティウス・カトゥルスは、第一次ポエニ戦争の時に三百隻の艦を率いて対カルタゴ戦に出陣した。彼はシチリアとアフリカの間に位置するアエガテス諸島付近で、ヒミルコ指揮下の⁷⁹カルタゴの艦船六百隻が補給品やら他の積荷のせいで動きのとれなくなっているところを、撃沈或いは拿捕し、戦争を終結させた。和平を求めてきた敵に対し、彼は以下の条件でそれを認めた。その条件とは、シチリア、サルディニア、及びイタリアとアフリカの間に位置する他の諸島部から撤退すること、そしてヒスパニアのヒベルス川以西には手を出さぬこと、であった。

42 ハミルカルの子ハンニバルは、十一歳の時に⁸⁰父に祭壇へと連れて行かれ、ローマ人に対する永遠の憎しみを誓った。この時以降、彼は父の陣営でその戦友であり、兵卒であった。父の死後、戦争の口実を求めてローマの同盟国サグントゥム市を六ヶ月のうちに破壊した。続いてアルプスの道を開くと、イタリアへと通り抜けた。そしてティキヌス河畔ではプブリウス・スキピオを、クレメラ河畔では⁸¹センプロニウス・ロングスを、トラシメヌス湖畔ではフラミニウスを、またカンナエではパウルスとウァロを撃破した。だが彼はローマ市を攻略できたにも関わらず、カンパニアへと向きを変え、その地の甘美さに骨抜きにされてしまった。そしてローマ市から三里の処に陣営を張ったが、嵐のため退かざるを得ず、最初にファビウス・マクシムスによって戦意をそがれ、続いてウァレリウス・フラックスによって撃退され、グラックスとマルケルスによって追撃された。彼はアフリカに召還された後、スキピオに撃破され、シリアの王安ティオコスの元に難を逃れて王をローマに敵対させた。そして王が敗北した後は、ビテュニアの王プルシアスの元に退いた。だがローマの使節が王に彼の身柄引渡しを要求したため、指輪の宝石に仕込んでいた毒を仰ぎ最期を遂げた。彼はリビュッサで石棺に安置され、その棺には今日も尚こう記されている — ハンニバルここに眠る —。

43 クイントゥス・ファビウス・マクシムス・クククタトル（「遅延者」）は、口元の⁸²ウエルカから「疣持ち」と、またその温厚な気質から「仔羊」とも呼ばれた。彼は執政官であった時、リグリア人に対する戦勝の凱旋式を挙げた。またハンニバルを延滞戦術で消耗させたが、独裁官副官のミヌキウスの指揮権が自分のものと同等とされるのを認容せざるを得なかった。だがそれにも関わらず⁸³、彼が窮地にあった時にはその救出に向かった。彼はハンニバルをファレルヌス地方に封じ込めた。マリウス・スタティリウスが敵側に寝返ろうとしていた時には、馬と武器を贈って引き留めた。また極めて強兵であった一人のルカニア人が女と恋に落ち、欠勤が目立つよう

って」

⁷⁹ *Sher. duce Himilcone* 「ヒミルコ指揮下の」 *Pichl. duce Hannone* 「ハンノ指揮下の」

⁸⁰ *Sher. undecim annos natus* 「十一歳の時に」 *Pichl. novem annos natus* 「九歳の時に」

⁸¹ *Sher. apud Cremeram* 「クレメラ河畔では」 *Pichl. apud Trebiam* 「トレビア河畔では」

⁸² *Sher. in labris ita* 「口元の」 *Pichl. in labris sita* 「口元にあった」

⁸³ *Sher. et nihilo minus* 「だがそれにも関わらず」 *Pichl. nihilo minus* 「それにも関わらず」

になった時には、その女を買い取って贈物として彼に与えた。タレントウム市を敵軍から奪還し、同市から移送したヘルクレス像をカピトリウム神殿で奉献した。捕虜を身請けする協定を敵軍と結んだが、その協定が元老院に拒絶されそうになると、自分の地所を二十万で売り払って誓約を履行した。

44 **プブリウス・スキピオ・ナシカ**は元老院によって「最良の市民」と宣言され、「神々の大母神」をそのもてなし役として迎え入れた。グラックスにより自分が執政官に指名されたのがト占の結果に反すると⁸⁴知った時には、その行政官職を辞任した。監察官であった時には、誰しもが自分自身を誇示するために広場に彫像を建てていたのを撤去した。執政官の時にはダルマティア人の町デルミニウムを攻略した。兵士たちからは「^{インペラトル}戦勝將軍」の称号を、元老院からは凱旋式を提供されたが、彼はこれらを辞退した。彼は弁舌においては第一人者であり、法学においては最高の権威であり、気質においては最大の思慮深さを有した。それゆえ巷では「^{コルクム}賢人」と呼ばれた。

45 **マルクス・マルケルス**はガリア人の族長ウィルドマルスを⁸⁵一騎打ちで破り、ロムルスに次いで「^{スボリア・オピマ}見事な戦利品」をユピテル・フェレトリウス神に奉献した三番目の人物となった。ノラ市近郊では狭い地勢に助けられ、ハンニバルであっても敗北させるのは可能である、と知らしめた⁸⁶。彼はシュラクサ市を三年かけて攻略した。だが讒言のせいで凱旋式を元老院によって拒まれたため、自身の判断によりアルバヌス山で凱旋式を挙行了。執政官を五期務めた時、彼はハンニバルの伏兵に嵌り、壮麗な埋葬を受けた。その遺骨はローマに送り還されたが、掠奪者たちに横取りされ消失してしまった。

46 ハンニバルがイタリアを荒らしていた頃、シビュラの書の託宣により「神々の大母神」がペシヌスより召喚された。だがティベリス川を上って運搬する途上、神像は突然高みに乗り上げてしまった。そして如何なる力をもってしても動かせなかったところ、これを動かせるのは最も貞節な女の手のみである、と託宣書から判明した。そこで近親相姦を犯したと虚偽の嫌疑をかけられていたウェスタの巫女**クラウディア**が、もし私の純潔を知るならば、私の後に続き給え、と女神に請うた。そして腰帯を船に結びつけると、船を動かしたのである。彼女は神々の大母神の神像を運び、「最良の市民」と宣言されたナシカには神殿が建立された⁸⁷。

⁸⁴ *Sher. adversum auspicia cum* 「ト占の結果に反すると」 *Pichl. is cum adversum auspicia* 「彼は…ト占の結果に反すると」

⁸⁵ *Sher. Virdomaram* 「ウィルドマルスを」 *Pichl. Viridomaram* 「ウィリドマルスを」

⁸⁶ *Sher. Hannibalem posse apud Nolum locorum angustia adiutus vinci docuit.* 「ノラ市近郊では狭い地勢に助けられ、ハンニバルであっても敗北させるのは可能である、と知らしめた」 *Pichl. Primus docuit, quomodo milites cederent nec terga praeberent. Hannibalem apud Nolum locorum angustia adiutus vinci docuit.* 「彼は兵士が背を向けずに退却するにはどうしたら良いかを最初に教示した人物であった。ノラ市近郊では狭い地勢に助けられ、ハンニバルに敗北の味を教えた」

⁸⁷ *Sher. Simulacrum Matris deum advexit. Templum aedificatur Nasicae qui vir optimus iudicabatur.* 「彼女は神々の大母神の神像を運び、「最良の市民」と宣言されたナシカには神殿が建立された」 *Pichl. Simulacrum Matris deum, dum templum aedificatur, Nasicae, qui vir optimus iudicabatur, quasi hospiti datum.* 「神々の大母神の神像は、神殿が建立されている間、「最良の市民」と宣言されたナシカに、そのも

- 47 **マルクス・ポルキウス・カトー**はトゥスクルムの出身であった。彼はウァレリウス・フラックスにローマ行きを強く勧められ、シチリアでは軍団指揮官を務めた。スキピオ麾下の財務官であった時には極めて意思堅固であり、國務官としては極めて公明正大であった。國務官の職にあった時にはサルディニアを征服し、その時にエンニウスからギリシアの学問を教わった。執政官の時にはケルトイベリア人を征服し、更に彼らが反乱を起こせぬようにするため、個々の町に市壁を破壊するよう布告を送った。それぞれの町が命令を受けているのは自分たちだけだと各々に思い込んだため、皆それに従った。シリア戦争ではマルクス・アキリウス・グラブリオ麾下の軍団指揮官としてテルモピュライの峠を占領し、敵の駐留軍を駆逐した。監察官になった時には、執政官経験者のルキウス・フラミニウスを元老院から除名した。それはこの人物が、ガリアにおいて一人の娼婦への見世物にするため、ある男を牢から引き出し、宴席でその咽喉を掻き切るよう命じた、との理由によるものであった。彼は自身の名においてバシリカを建設した最初の人物であった。婦人連中がオッピウス法の下で没収された装飾品の返還を要求した際には、彼女らに抵抗した。彼は飽くなき告発者であり、八十歳を超えていたにも関わらずガルバを悪政で告発し、一方彼自身も四十四回にわたり告発され、華々しく無罪判決を受けた。カルタゴは破壊すべし、というのが彼の主張であった。彼は傘寿を迎えた後に息子を授かった。葬儀を行う際には、このカトーの肖像^{イマーゴ}を掲げるのが常となっている。
- 48 ハンニバルの弟ハスドルバルは大軍を率いてイタリアに渡った。もし彼がハンニバルとの合流にも成功していたならば、ローマの支配には終止符が打たれるところであった。だがアプリアでハンニバル軍に接して陣を張っていた**クラウディウス・ネロ**は、軍の一部を陣営に残すと、精鋭を率いてハスドルバルの元に急行した。そしてセナ市近郊のメタウルス河畔で同僚執政のリウィウスと合流した後、両執政官はハスドルバルを打ち破った。ネロは来た時と同じ速さで舞い戻ると、ハスドルバルの首級をハンニバル軍の防塁の前に放り投げた。これを見たハンニバルは、俺はカルタゴの運命に負けようとしている、と呟いた。彼らの業績により、リウィウスは凱旋式を、ネロは小凱旋式^{オウァティオ}を挙げてローマ市に入城した。
- 49 **プブリウス・スキピオ**はその武勲のゆえに「^{アフリカの征服者}」の名を受けた⁸⁸。彼はユピテル神の申し子であると信じられていた。というのも、スキピオの母が彼を身籠る以前、その寝台に蛇が現れたことがあり、また彼が幼子だった時分、大蛇がその体に巻きつくことがあったが、何も危害を加えなかったからである。彼が真夜中にカピトリウム神殿に向かう際も、犬が吠えかかるようなことは決して無かった。また彼は何事かに取り掛かる前には必ずユピテルの祀堂で長時間座し、その様はまるで神の意志を拝受するかの如くであった。十八歳の時にはティキヌス河畔で卓越した武勇を振るい、父親を救った。カンナエの大敗北で最高位の貴族の若者たちがイタ

てなし役であるかの如く委ねられた」

⁸⁸ *Sher. ex virtutibus nominatus Africanus* 「その武勲のゆえに「^{アフリカの征服者}」の名を受けた」 *Pichl. ex virtute Africanus dictus* 「その武勇のゆえに「^{アフリカの征服者}」と呼ばれた」

リアを捨て去ろうと望んだ時には、自身の権威で彼らを食い留めた。そして無傷の残存軍を率いて敵の陣営の真中を抜け、カヌシウムへと導いた。二十四歳の時に国務官としてヒスパニアに派遣されると、辿り着いたその日にカルタゴ（カルタゴ・ノウァ）を攻略した。一人の極めて美しい乙女がおり、その姿を一目見ようと皆が群がるほどであったが、スキピオは彼女を自分の元に連れて来ることを禁じ、一方で彼女の父親をその保証人となって援助した。彼はハンニバルの弟ハスドルバルとマゴをヒスパニアから放逐した。またマウリタニア王シュパクスと提携を結び、マッシニッサを同盟者として迎え入れた。勝利を収めて母国に帰還した後、年齢が達していなかったにも関わらず執政官に選ばれ、同僚執政の合意の下、艦隊をアフリカに移送した。そしてハスドルバルとシュパクスの陣営を一晩で制圧した。イタリアから召還されたハンニバルを撃破し、敗北したカルタゴに対して講和条件を課した。アンティオコスとの戦争では弟の補佐官を務め、捕虜となった息子が無償で受け戻した。平民護民官ペティリウス・アティウスにより⁸⁹強要罪で告発された時には、民会の眼前で会計書を引き裂き、こう言った。「この日、私はカルタゴを征服した。それゆえ、我らはカピトリウム神殿に赴き、神々に祈りを捧げるのが道理であろう！」その後スキピオは自ら亡命生活に甘んじ、そのまま余生を過した。死に際しては、妻に自分の亡骸をローマに戻さぬよう言い遺した。

50 リウィウス・サリナトル（「塩売り」）は最初に執政官であった時、イリュリア人に対する戦勝の凱旋式を挙げた。だがその後憎悪を受けたため横領罪で起訴され、メティア（マエキア）区を除く全トリブス区から断罪された。二期目は自身の政敵クラウディウス・ネロを同僚として執政官になったが、国家の行政が不和のために乱れぬようにと彼と提携を結び、ハスドルバルに対する戦勝の凱旋式を挙げた。再びクラウディウス・ネロを同僚に監察官になった時には、メティア（マエキア）区を除く全トリブス区民を^{フェラリイ}二等市民の身分に落とし、俸給を剥奪した。それは彼らが、或いは以前に自分を不当に断罪し、或いは後になってかくも多くの官職を無定見に与えた、との責めによるものであった。

51 クイントゥス・フラミニウス（ティトゥス・クインクティウス・フラミニウス）はトラスメヌス湖畔で討死したフラミニウスの息子であった。彼は執政官としてマケドニアを割り当てられた時、有力者カロペスの羊飼いたちの案内を受けて属州に入ると、ピリッポス王を戦闘で破りその陣地を奪い取った。そして王の子デメトリオスを人質として受け取り、更に王を科料に処した後、王座に復位させた。またスパルタのナビスからも息子を人質として受けた。彼は伝令を通じてサモスのユノ神のための競技祭⁹⁰を告知した。更にはハンニバルの身柄引渡しを要求するべく、使節としてプルシアスの元に派遣された。

52 クイントゥス・フルウィウス・ノビリオルは執政官であった時にウェットネス族とオレタニ

⁸⁹ Sher. Ateio 「アティウスにより」 Pichl. Actaeo 「アクタエウスにより」

⁹⁰ Sher. Ludos Iunoni 「ユノ神のための競技祭」 Pichl. Ludos Iunonis 「ユノ神の競技祭」

族を撃破し、その功から小凱旋式^{オウァティオ}を挙げてローマ市に入城した。マケドニア戦争に参戦した⁹¹アイトリア同盟が、その後アンティオコスの側に寝返った時には、執政官として度重なる戦闘でこれを破った。そしてアンブラキアの町に追い込んでその降伏を受け容れたが、一方で彫像や絵画は掠奪した。彼はアイトリア同盟に対する戦勝の凱旋式を挙げた。この勝利はそれ自体が偉大なものであったが、更に彼の友人マルクス・エンニウス⁹²が類稀なる賛辞によって称えるところとなった。

- 53 スキピオ・アジアティクスはアフリカヌスの弟で、体が病弱だったにも関わらず、アフリカでの武勇のゆえに兄から称賛を受けた。執政官であった時には、兄を補佐官にシリアの王アンティオコスをシピュロス山で破り — これは雨のせいで敵軍の弓の勢いが鈍くなったためであった — 王の継承した王国の⁹³一部を没収した。この功により彼は「アジアの征服者」と呼ばれた。後に彼が公金着服罪で起訴された時には、投獄されるのを防ぐため、平民護民官の大グラックス⁹⁴が拒否権を行使した。だが監察官マルクス・カトーは、彼に恥辱を与えるためその公馬を剥奪した。
- 54 シリアの王アンティオコスは自分の兵力を過信したため、かつてトラキアにおいてローマ人が彼の父祖から奪い領有していた⁹⁵リュシマキア市を奪回するとの名目でローマに戦争を仕掛け、たちまちのうちにギリシアとその島々を占領した。けれども彼はエウボイアで贅沢に耽り、骨抜きになってしまった。アキリウス・グラブリオの⁹⁶出現で奮起し、テルモピュライを占拠したものの、マルクス・カトーの働きでその地から追い出され小アジアへと逃げ戻った。ハンニバルに指揮を委ねた海戦ではルキウス・アエミリウス・レギルスに撃破され、航海中に捕えたスキピオ・アフリカヌスの息子を父の元に送り帰した。そこでアフリカヌスは、あたかもその恩に報いるが如く、ローマとの友好関係を求めるよう王に勧めた。アンティオコスはこの助言を蹴ると、シピュロス山においてルキウス・スキピオと戦を交えた。だが敗北してタウロス山地の彼方まで退去させられた後、宴席で酩酊して暴行を加えたことのある⁹⁷側近たちに暗殺された。
- 55 ガイウス・マンリウス・ウルソはスキピオ・アジアティクスの属州に秩序を定めるべく派遣されたが、凱旋への野望から、アンティオコスを支援したピシディア人とガラティア人に戦争を仕

⁹¹ *Sher.* bello Macedonico interfuerant 「マケドニア戦争に参戦した」 *Pichl.* bello Macedonico Romanis affuerant 「マケドニア戦争でローマ側を支援した」

⁹² *Sher.* M. Ennius 「マルクス・エンニウス」 *Pichl.* Ennius 「エンニウス」

⁹³ *Sher.* regni relict 「継承した王国の」 *Pichl.* regni 「王国の」

⁹⁴ *Sher.* Gracchus pater tribunus plebis 「平民護民官の大グラックスが」 *Pichl.* Gracchus pater tribunus plebis, inimicus eius 「平民護民官の大グラックスが、彼の政敵であったにも関わらず」

⁹⁵ *Sher.* quam a maioribus suis in Thracia quondam Romani possidebant 「かつてトラキアにおいてローマ人が彼の父祖から奪い領有していた」 *Pichl.* quam a maioribus suis in Thracia conditam Romani possidebant 「彼の父祖がトラキアに創建したものであったが、ローマ人が領有していた」

⁹⁶ *Sher.* Acilii Glabronis 「アキリウス・グラブリオの」 *Pichl.* M. Acilii Glabronis 「マルクス(マニウス?)・アキリウス・グラブリオの」

⁹⁷ *Sher.* pulsaverat 「暴行を加えたことのある」 *Pichl.* pulsarat 「殴打したことのある」

掛けた。彼らは他愛も無く打ち破られ、捕虜の一人となったオルギアグンテス王の⁹⁸妻は、とある百人隊長の監視下に置かれることになった。彼女はこの者に力づくで犯されてしまったが、この辱めについては何も言わず、後に身請けが叶うと、間男を処刑すべく夫に引き渡した。

56 **ルキウス・アエミリウス・パウルス**はカンナエで討死したパウルスの息子であった。彼は三度の落選を経て最初の執政官職を手に入れた時、リグリア人に対する戦勝の凱旋式を挙げた。またその業績の一覧を板に描かせ、公に顕示した。二期目に執政官であった時には、ピリッポスの子にしてマケドニアの王ペルセウスをサモトラケで⁹⁹捕えた。ペルセウスの縛られた¹⁰⁰姿に彼は涙を流し、自らの傍らに座るよう指示したが、その一方で凱旋式には連行した。この歓喜の最中に彼は二人の息子を失った。だが彼は民会の前に進み出ると、如何なる苦境が国家を脅かしていたとしても、それは私自身の不幸をもって終わったのである、と言い、幸運の女神に感謝を捧げた。これら全てのゆえに、彼には大競技祭で凱旋將軍の装束を着用することが民会と元老院によって認められた。彼の放蕩¹⁰¹と貧困のせいで、その死後は所持品を売却せねば妻に嫁資を返済するのも叶わなかった。

57 **ティベリウス・センプロニウス・グラックス**は勝れて高貴な家系の出であった。彼はスキピオ・アジアティクスを政敵としていたにも関わらず、彼が投獄されるのを是としなかった。国務官の時にはガリアを、執政官の時にはヒスパニアを、そして二期目の執政官職に就いた時にはサルディニアを征服し、多数の捕虜を連行した。捕虜の数があまりにも多かったため、その売却は長期に渡り、この出来事は「サルディニア人大安売り」の諺となった。監察官であった時には、地方トリブス区を獲得していた解放奴隷を四つの都市トリブス区に振り分けた。このため彼の同僚執政クラウディウスが民会に起訴される羽目になり — というのも、ティベリウス自身はその権威が身を守っていたからである — 二つの財産等級が彼を断罪した時、ティベリウスは誓いを立て、自分もクラウディウスと共に追放処分を受けよう、と宣言した。かくして被告は無罪となった。また¹⁰²ティベリウスの自宅で二匹の大蛇が婚礼の床から這い出して来た時には、託宣が下され、殺された大蛇と同性の方の家主が死するであろう、と告げられた。そこで彼は、妻コルネリアへの愛から、雄の方を殺すよう命じたのであった。

58 **プブリウス・スキピオ・アエミリアヌス**はパウルス・マケドニクスの子であったが、スキピオ・アフリカヌスの養子となった。マケドニアで父と行動を共にした際には、敗退したペルセウスをあまりに執拗に追い続けたため、彼が陣営に戻った時には真夜中になっていた。ヒスパニアではルクルスの補佐官として、インテルカティア市近郊で戦いを挑んできた相手を一騎打ちで破

⁹⁸ *Sher. regis Orgiaguntis* 「オルギアグンテス王の」 *Pichl. regis Orgiagontis* 「オルギアゴンテス王の」

⁹⁹ *Sher. apud Samothracas* 「サモトラケで」 *Pichl. apud Samothracas deos* 「サモトラケの神々の眼前で」

¹⁰⁰ *Sher. vinctum* 「縛られた」 *Pichl. victum* 「敗北した」

¹⁰¹ *Sher. licentiam* 「放蕩」 *Pichl. continentiam* 「節制」

¹⁰² *Sher. Et cum...* 「また…時には」 *Pichl. Cum...* 「…時には」

り、一番乗りで敵の市壁によじ登った。アフリカでは將軍ティトゥス・マリウス麾下の¹⁰³軍団指揮官として、包囲陣に囲まれていた八個歩兵隊を智略と武勇をもって救出し、彼らから黄金の「攻囲冠」を贈られた。造営官職に立候補した際には、年齢が達していなかったにも関わらず執政官に選ばれ、六ヶ月でカルタゴ市を破壊した。ヒスパニアのヌマンティアでは、最初に兵の軍紀を立て直した後、兵糧攻めで同市を攻略した。彼はこの時¹⁰⁴「ヌマンティアの征服者」と呼ばれた。ガイウス・ラエリウスとは極めて昵懇の間柄にあり、諸王歴訪に派遣されたおりには、ラエリウスの他には奴隸二名を自身に同行させたのみであった。その業績のため傲慢になった彼は、グラックス殺害は妥当なものであると思う、との答えを返した。市民が喚き立てると、「あの者たちを静ませよ。イタリアは母国ではなく、継母に過ぎぬ者らを」と言い、更にこう付け加えた。「私が奴隸として売り払った者らを。」いささか怠惰なムンミウスを同僚にして監察官になった時には、元老院でこう述べた。「貴兄が私に同僚を与えるか、さもなくば与えずにいてくれたら良かったのだが。」農地改革派が支持を得た後、彼は自宅で突然息絶えているところを発見され、その顔面の青あざが目に触れぬよう、頭部を覆われたまま埋葬された。彼の遺産は至極僅かで、三十二リブラの銀と、ニリブラ半の金を遺すのみであった。

- 59 アウルス・ホスティリウス・マンキヌスは国務官であった時、鳥占の結果が凶と出た上に何者とも知れぬ声が引き留める中、対ヌマンティア戦に向けて出陣した。彼はヌマンティアに到着しポンペイウスの軍を受け取ると、まず最初に軍を立て直そうと思立ち、荒れ野に向かうことにした。その日はたまたまヌマンティア人が娘を娶らせる儀式を行っていた¹⁰⁵。そして一人の見目好い娘に二人の男が共に求婚したため、娘の父親は彼らにこのような条件を出した — 敵の右手をもたらした方に娘は嫁ぐことになろう、と。そこで若者たちは出向いて行ったが、ローマ軍が遁走するかの装いで足早に去って行くのを知り、彼らの仲間に¹⁰⁶報告した。すぐさまヌマンティア人は自軍の兵四千をもって二万のローマ兵を倒した。マンキヌスは財務官¹⁰⁷ティベリウス・グラックスを証人として、敵側の条件を呑んで条約を結んだ。この条約が元老院によって拒絶されると、マンキヌスはヌマンティア側に引き渡されたが、受け容れられなかった。彼は卜占により陣営へと連れ戻され、後に国務官の職を得た。

- 60 ルキウス・ムンミウスはアカイア同盟を打倒し「アカイアの征服者」と呼ばれた¹⁰⁸。彼は対

¹⁰³ *Sher.* sub Tito Mallio 「ティトゥス・マリウス麾下」 *Pichl.* sub Tito Manilio 「ティトゥス・マニリウス麾下」

¹⁰⁴ *Sher.* hic 「この時」 *Pichl.* hinc 「このゆえに」

¹⁰⁵ *Sher.* Eo die Numantini forte sollempni 「その日はたまたまヌマンティア人が…儀式を行って」 *Pichl.* Eo die Numantinis forte sollempni 「その日はたまたまヌマンティア人にとって儀式の日で」

¹⁰⁶ *Sher.* ad suos 「彼らの仲間に」 *Pichl.* rem ad suos 「その事を彼らの仲間に」

¹⁰⁷ *Sher.* quaestore 「財務官」 *Pichl.* quaestore suo 「彼の財務官」

¹⁰⁸ *Sher.* deleta Achaia, Achaicus 「アカイア同盟を打倒し「アカイアの征服者」と呼ばれた」 *Pichl.* devicta Achaia Achaicus dictus 「アカイア同盟を制圧し「アカイアの征服者」と呼ばれた」

コリントス戦に¹⁰⁹派遣されたおり、他人の努力で得られた勝利を横取りした。というのも、メテルス・マケドニクスがヘラクレイア近郊でコリントス軍を敗走させ、その指揮官クリトラオスを倒すと、ムンミウスは従者と僅かばかりの騎兵を率いてメテルスの砦へと¹¹⁰急行し、レウコペトラでディアイオス指揮下のコリントス軍を破ったからである。ディアイオスは我が家に逃げ帰ると、家に火をかけた。そして妻を殺して火中に投げ込み、自らは毒を仰いで最期を遂げた。ムンミウスはコリントス市から彫像や絵画を掠奪し、これらの品々でイタリア全土を満たしたが、我が家には何ひとつ持ち込むことはなかった。

- 61 クイントゥス・カエキリウス・メテルスはマケドニアを征服したことから¹¹¹「マケドニアの征服者」と呼ばれた。彼は国務官であった時に偽ピリッポス — 彼はまたアンドリスコスとも呼ばれた — を破った¹¹²。だがそのあまりの厳格さゆえに平民の憎悪的となり、そのため二度の落選を経てやっとのことで執政官に選ばれた後、ヒスパニアでアルバケス族を征服した。コントレピア市近郊では駐屯地から排撃された歩兵隊に対し、戻って駐屯地を奪還せよ、と命じた。彼が独断的かつ唐突な判断ですべてを執り行っていたため、一人の友人が、貴公はどうなさる御所存か、と尋ねたところ、メテルスは彼にこう言った。「私はもし自分の上衣に自分の考えが知られていると思ったならば、その上衣を燃やしてしまうことだろう。」メテルスは四人の息子^{トウニカ}の父であり、その最期の時には息子らの肩に担がれて墓所へと運ばれた。彼はこれらの息子のうち三人が執政官となり、更に一人が凱旋式さえ挙げるのを見届けることができた。
- 62 クイントゥス・カエキリウス・メテルス・ヌミディクス（「ヌミディアの征服者」）は、ユグルタ王に対する戦勝の凱旋式を挙げた。監察官であった時には、自身をティベリウス・グラックスの子と詐称したクインティウス（エクイティウス）を市民として登録するのを拒否した。彼はまた力づくで可決されたアプレイウス法に遵守の誓いを立てるのも拒否し、そのため追放処分を受けてスミュルナに亡命した。その後カリディウス法案によって呼び戻され、たまたま競技祭のおりに劇場で書簡を受け取ることがあったが、見世物が終わる前にわざわざそれを開こうとはしなかった。自分の妹メテラの夫に弔辞を送るのも拒否したが、それはこの人物だけが¹¹³法に反して判決に不服を申し立てる、ということがあったためだった。
- 63 クイントゥス・メテルス・ピウス（「孝行者」）はヌミディクスの子で、涙ながらの嘆願を粘

¹⁰⁹ *Sher. adversum Corinthios* 「対コリントス戦に」 *Pichl. consul adversum Corinthios* 「執政官として対コリントス戦に」

¹¹⁰ *Sher. in Metelli claustra* 「メテルスの砦へと」 *Pichl. in Metelli castra* 「メテルスの陣営へと」

¹¹¹ *Sher. a domita Macedonia* 「マケドニアを征服したことから」 *Pichl. domita Macedonia* 「マケドニアを征服し」

¹¹² *Sher. ...vicit* 「…を破った」 *Pichl. ...vicit. Achaeos bis proelio fudit triumphandos Mummio tradidit* 「…を破った。またアカイア同盟軍を二度戦闘で敗走させ、彼らを凱旋式で連行すべくムンミウスに引き渡した」

¹¹³ *Sher. solus* 「…だけが」 *Pichl. olim* 「ある時」

り強く行って父親を呼び戻した¹¹⁴。国務官であった時には同盟市戦争でマルシ族の指揮官クイントゥス・ポペディウス（ポッパエディウス）を倒した。執政官であった時にはヒスパニアでヘルクレイウス兄弟を鎮圧し、セルトリウスをヒスパニアから放逐した。青年時代に国務官職と神祇官職に立候補した時には、執政官級の人々よりも高い得票数を得た。

64 ティベリウス・グラックスはアフリカヌスの母方の孫にあたった。ヒスパニアではマンキヌスの財務官として彼の恥辱的な条約に賛同したが、その弁舌のおかげで身柄引渡し危機からは逃げおおせた。彼は平民護民官になると、何びとたりとも千ユゲラを越える土地を有してはならぬ、とする法案を提出した。だが同僚のオクタウィウスが拒否権を行使しようとしたため、先例を見ぬやり方で彼を行政官職から罷免した。続いてアッタロスの遺産から得られた資金を処分し、市民に分配する旨を提案した。その後自身の任期を延長しようと企図した際、彼は不吉な予兆が出ていたにも関わらず民衆の中に進み出ると、すぐさまカピトリウム神殿へと向かった。その時彼は頭上に手をかざしていたが、この仕草によって自身の身の安全を市民に託そうとしていたのだ。だが貴族たちは、これを彼がまるで王冠を求めているかの如くに受け取った。そこで執政官のムキウスがぐずぐず躊躇している間に、スキピオ・ナシカが、国家を救わんと望む者は我に続け、と号令をかけ、グラックスをカピトリウム神殿まで追いかけて打ち倒した。その遺骸は造営官ルクレティウスの手でティベリス川に投げ込まれ、ここからこの男は「^{ウイスビロ}葬儀屋」と呼ばれた。ナシカについては、彼を憎悪から逃れさせるため、使節派遣の名目で小アジアへと厄介払いされることになった。

65 ガイウス・グラックスは財務官として劣悪な環境のサルディニアを割り当てられた時、後任者がやって来なかったため自らの意思で属州を離れた。アスクルム市とフレグラエ市の反乱に際しては、反乱に対する憎悪に耐え抜いた。彼は平民護民官になると、農地法案と穀物法案を提出し、更にカプアやタレントゥムに植民を送ることさえも主張した。また土地分割のための三人委員に、自分自身と、フルウィウス・フラックス、そしてガイウス・クラッススを任命した。だが平民護民官ミヌキウス・ルフスが彼の法を無効にしようとしたため¹¹⁵、彼はカピトリウム神殿にやって来た。そこで暴動のさなか執政官オピミウスの伝令アンテリウスが殺されると、彼は広場に降りて来て、無思慮にも民会を解散させ平民護民官の手から奪った。この咎で元老院に召喚されたが、出頭せず、奴隷に武装させてアウェンティヌス丘に立て籠もった。その場所でオピミウスに敗退した後、月の女神の神殿から飛び降りる際に足首を捻ってしまったが、友人のポンポニウスが三重門の前で、またプブリウス・ラエトリウスがティベリス川に架る木橋の上で追っ手らに抵抗している間に、フリナ神の地所まで¹¹⁶辿り着いた。そこで彼は自らの手によってか、

¹¹⁴ *Sher. patrem...revocavit* 「父親を呼び戻した」 *Pichl. Pius, quia patrem...revocavit...* 「父親を呼び戻したため「孝行者」と呼ばれ…」

¹¹⁵ *Sher. abrogante* 「無効にしようとしたため」 *Pichl. obrogante* 「廃案にしようとしたため」(cf. Flor. 2.3)

¹¹⁶ *Sher. in locum* 「地所まで」 *Pichl. in lucum* 「聖杜まで」

奴隷エウボロスの手を借りてか、命を断ったのであった。その首はグラックスの友人セプティムレイウスによってオピミウスの元に届けられ、その重さの黄金で報酬が支払われた。だが強欲さのために首には鉛が流し込まれ、ひときわ重みを増していた、と伝えらる。

66 マルクス・リウィウス・ドルススは生まれと弁舌において卓越した人物であったが、一方で野心的にして傲慢でもあり、造営官になった時には途方もなく盛大な見世物を催した。その当時、彼の同僚レンミウスが国家にとって有益であるとして何某かの提案をすることがあったが、その同僚に彼はこう言った。「貴公に何の関わりがあるのかね？我らの国家が。」小アジアで財務官であった時には、如何なるものも自分より目立ってはならぬからと、何一つ目立つものを身につけなかった。平民護民官になると、ラテン市民にはローマ市民権を、平民には土地を、騎士には元老院の議席を、元老院には法廷を明け渡した。彼はあまりに気前が良過ぎた。実際彼自身、自分は ^{カエルム} 天 と ^{カエヌム} 泥 以外は誰かに分け与えていないものを何一つ残さなかった、とさえ豪語した。そのおかげで、金に困った時にはその品位にそぐわぬことも数多く行った。マウリタニアの族長マグドゥルサが王の疎みを受けたため亡命した時には、賄賂を受け取って彼の身柄をボックス王に引渡し、王はこの男を象の前に投げ出した。またヌミディア王の子アドヘルバルを自宅に拘禁し、密かに王から彼の身請け金を¹¹⁷受けようと当て込んだ。政敵カエピオが彼の政策に反対した際には、タルペイアの岩から投げ落とすぞ、と言った。執政官が¹¹⁸彼の穀物法案に反対した際には、民会の場でその首根っこをあまりに強く捻り上げたため、鼻からしこたま血が噴き出る羽目になった。だが彼は執政官をその有名な贅沢ぶりで誇り、あれは鯛から噴き出る塩水だ、と口にした。その後彼は人望を失い、代わって憎悪を受けるようになった¹¹⁹。というも、平民は土地を受け取って大喜びだったが、土地を追われた者たちは悲嘆に暮れていた。騎士は元老院議員に選ばれ歓喜し¹²⁰、元老院は法廷を明け渡され小躍りしたものの、騎士との協調は耐え難かった。そのためリウィウスは、元老院が彼の約束したローマ市民権を求めるラテン市民の要求を先送りするのではないかと不安を抱き、癲癇を起こしたためか山羊の血を仰いだためか突然公の場で倒れ、瀕死の状態自宅で運ばれた。イタリア中で彼に対する誓約が公に立てられたが、ラテン市民が執政官をアルバヌス山で暗殺しようと目論んだ時、彼はピリップスに用心するよう忠告してやった。このために元老院で告発され、家に戻ろうとするところを、群集のうちから送り込まれた刺客の手にかかって倒れた。彼の暗殺に対する憎悪の目はピリップスとカエピオに向けられることになった。

67 七期執政官を務めたガイウス・マリウスはアルピヌムの出身で、卑しい身分の生まれであつ

¹¹⁷ *Sher. redemptionem eius occulte* 「密かに…彼の身請け金を」 *Pichl. redemptionem eius occultam* 「彼の内密の身請け金を」

¹¹⁸ *Sher. Consuli* 「執政官が」 *Pichl. Philippo consuli* 「執政官ピリップスが」

¹¹⁹ *Sher. ex gratia in invidiam venit* 「人望を失い憎悪を受けるようになった」 *Pichl. ex gratia nimia in invidiam venit* 「そのあまりの人望のゆえに憎悪を受けるようになった」

¹²⁰ *Sher. laetabantur* 「歓喜し」 *Pichl. laetabantur, sed praeteriti querebantur* 「歓喜したが、見過された者らは不平を述べた」

だが、高位の諸官職を順調に務め上げた。ヌミディアでメテルスの補佐官であった時には、彼を非難することで執政官職を手に入れ、ユグルタを捕えて凱旋戦車の前を連行した。更に翌年の執政官にも選ばれ、キンブリ族をガリアのアクアエ・セクステシアエ近郊で、テウトネス族をイタリアのサウィディウスの野で¹²¹破り、その戦勝の凱旋式を挙げた。続けざまに六期目まで順調に執政官に選ばれた後、反乱を起こした平民護民官アプレイウスと国務官グラウキアを元老院決議に従って鎮圧した。だがスルピキウスの法案によってスラから属州を奪おうとしたため、彼に戦鬪で打ち破られ、ミントウルナエの沼地に身を潜めることになった。見つかって投獄された後、彼の処にガリア人の暗殺者が送り込まれたが、マリウスはその顔に満ちた威厳によって暗殺者を怖気づかせ追い払った。そして小船を受け取るとアフリカに渡り、そこで長く亡命生活を送った。その後キンナの独裁政権によって呼び戻されると、収容所から出した奴隷で軍隊をこしらえ、政敵らを殺して受けた辱めに報復した。だが七期目の執政官職に就いた時、若干の人々の伝えるところでは、彼は自害して果てたという。

68 **小ガイウス・マリウス**は二十七歳にして執政官職に就いたが、彼の母はこの官職が彼にはあまりに早過ぎると嘆いた。彼は非道さにおいて父親似であり、武装して元老院議事堂を包囲すると、政敵を殺戮して彼らの遺骸をティベリス川に投げ込んだ。スラに対して備えていた戦争の準備の最中には、サクリポルトゥス近郊で不眠と労苦のあまり疲れ果てて戸外で休息を取っていたところ、不在のうちに敗北し、戦鬪に加わらず潰走に加わる様であった。彼はプラエネステに難を逃れたものの、そこでクレティウス・アフエラに包囲され、地下道を通して逃亡を試みた。けれども全ての道が封鎖されているのを悟った時、彼はポンティウス・テレシヌスに自分の咽喉を差し出し掻き切らせた。

69 **ルキウス・コルネリウス・キンナ**は破廉恥極まりない人物で、恐るべき冷酷さをもって国家を破壊し尽くした。最初に執政官職に就いた時には、追放者を呼び戻す法を提出して同僚執政のオクタウィウスの妨害を受け、官職を剥奪されてローマ市から逃亡した。そこで解放の約束を餌に奴隷らと呼び集めて敵を打ち破ると、オクタウィウスを殺害し、ヤニクルムの丘を占領した。二期目と三期目には自分で自分を執政官に任じた。だが四期目の執政官職に就いて対スラ戦の準備を進めていたおり、アンコナでそのあまりの冷酷さゆえに自兵から石打ちを受けて殺されてしまった。

70 **フラウィウス・フィンブリア**はキンナの一味であり、それゆえ極悪非道な人物であった。彼は執政官ウァレリウス・フラックスの補佐官として小アジアに出陣したが、不和がもとで解任されたため、軍を買収して指揮官を亡き者にするよう計らった。指揮権の記章を掠め取ると、彼は自らが属州に入り、ミトリダテスをペルガモンから放逐した。またイリオンでは城門の開かれるのがいささか遅かったことから、市に火をかけるよう命じた。だが市のミネルヴァ神殿は焼けず

¹²¹ *Sher. in campo Savidio* 「サウィディウスの野で」 *Pichl. in campo Raudio* 「ラウディウスの野で」

に残り、それゆえ神殿は女神の権威によって守られたのだと誰もが疑わなかった。まさにその場所で、フィンブリアは軍の指導部を斧で斬首した。だがまもなくスラにペルガモンで屈服させられ¹²²、買収された軍にも見棄てられたため、彼は自害して果てたのであった。

71 ウィリアトゥスは生まれはルシタニア人で、最初は貧しさから傭兵になり、次にはその機敏さから獵師になり、続いて豪胆さから盗賊になり、最後には大将になって対ローマ戦を始めた。そしてローマの将軍クラウディウス・ウニマヌスを倒し、続いてガイウス・ニギディウスも倒した。だが敗れてからよりも無傷のうちにポピリウスに和平を請う方が得策と考え、他の物は引き渡したが、一方で武器は温存しておいて再び戦争を開始した。カエピオは如何にしても彼を破ることができず、そこで手下二人を金で買収し、この者らはウィリアトゥスが酒で酔い潰れたところを暗殺した。だがこの勝利は金で買われたものであったため、元老院に承認されることはなかった。

72 マルクス・アエミリウス・スカウルスは貴族であったが、貧しかった。というのも、彼の父はパトリキ貴族であったにも関わらず、貧困のために木炭の取引を生業としていたからである。彼自身、当初は官職選に立つか両替商を営むか迷っていた。だが弁舌に長けていたことから、それを使って名声を得たのであった。最初はヒスパニアで角飾りの武勲章を受け、サルディニアではオレステスの麾下に従軍した。造営官であった時には、見世物を催すことよりも法の行使に精を出した。国務官の時には対ユグルタ戦に派遣され¹²³たものの、ユグルタの賄賂の誘惑に負けてしまった。執政官になった時には、儉約令及び解放奴隷の参政権に関する法を提出した。自分が前を横切ったにも関わらず国務官のプブリウス・デキウスが席に着いたままだった時には、彼に起立するよう命じ、その衣服を引き裂き、椅子を打ち壊した。そして何びとたりとも彼の処に訴訟を持ち込むこと相成らぬ、と布告した。彼は執政官としてリグリア人とタウリスキ族を¹²⁴征服し、その戦勝の凱旋式を挙げた。監察官であった時にはアエミリア街道を敷き、ムルウィウス橋を建設した。彼はその権威を使って多大なる権勢を振り、それは一私人としての提言でオピミウスをグラックスに対して出動させ、マリウスをグラウキアとサトゥルニヌスに対して出動させられるほどであった。彼はまた、我が子が守備隊を勝手に離れたことから、彼に自身の眼前に近づくことを禁じ、この恥辱から息子は自ら死を選んだ。年老いた後、スカウルスは平民護民官ウァリウスによって、まるで同盟諸市とラティウムを武装蜂起に走らせたのは彼であるかの如く非難されたが、その時彼は民会の前でこのように述べた。「ウェロナ人の¹²⁵ウァリウスは、アエミリウス・スカウルスが同盟諸市を武装蜂起に走らせたと言い、スカウルスは否認している。さて諸君は、どちらがより信ずるに値すると思うかね？」

¹²² *Sher. oppressus* 「屈服させられ」 *Pichl. obsessus* 「包囲され」

¹²³ *Sher. Iugurthae adversus* 「対ユグルタ戦に派遣され」 *Pichl. adversus Iugurtham* 「ユグルタと対峙し」

¹²⁴ *Sher. Ligures et Tauriscos* 「リグリア人とタウリスキ族を」 *Pichl. Liguras Tauriscos* 「リグリアのタウリスキ族を」

¹²⁵ *Sher. Veronensis* 「ウェロナ人の」 *Pichl. Sucronensis* 「スクロ人の」

73 ルキウス・アプレイウス・サトゥルニヌスは扇動的な平民護民官であった。彼はマリウスの兵の支持を買いつけるため、退役兵それぞれにアフリカの土地百ユグラを分譲する旨の法案を提出した。だが同僚のバエビウスが拒否権を行使しようとしたため、民衆を使って彼を石打ちにさせ排除した。また自身が民会を開いていたその同日に、國務官グラウキアが裁判を行うため市民の一部を解散させたとの理由で、彼の椅子を打ち壊し、より平民派寄りであると思われるようにした。彼は一人の解放奴隷の身分の者を雇い、自分はティベリウス・グラックスの子であると詐称させた。その証人としてセンプロニアが出廷させられ¹²⁶たが、嘆願しても脅迫しても、一族の恥辱を認知するよう彼女を口説き落とすことはできなかった。サトゥルニヌスは対立候補のアウルス・ノニウス（ノンニウス）を¹²⁷亡き者にした後、平民護民官に再選され、シチリア、アカイア、及びマケドニアを新たな植民の地に定めた。そしてカエピオが策略或いは背任行為によって手に入れた黄金を、その土地を買収するための資金に割り当てた。また自身の法に遵守の誓いを立てなかった者には火と水を禁じた。この法を多くの貴族たちが無効にしようとしたが¹²⁸、その時雷鳴が轟き渡り、彼らは叫び声を上げた。すると彼はこう言った。「さて、諸兄が静まらねば、雹が降り出すぞ。」だがメテルス・ヌミディクスは、誓いを立てるより亡命する道を選んだ。サトゥルニヌスは三期目に平民護民官に再選された時、自分の一味であるグラウキアを國務官にするため、彼の対立候補メンミウスを¹²⁹マルスの野で殺害するよう計らった。「両執政官は国家が如何なる害も被らぬよう策を講ずべし」との決定を下す¹³⁰元老院決議によって身を固めたマリウスは、サトゥルニヌスとグラウキアをカピトリウム神殿まで追撃して包囲した。そして最上の策を練って¹³¹水道管を断ち切ると、彼らの降伏を受け容れたのであった。だが降伏した者たちに対する誓約は守られなかった。グラウキアは首をへし折られ、アプレイウスは元老院議事堂の中に逃れたところを、天井から石と屋根瓦を受けて殺された。彼の首は、某ラビリウスなる元老院議員が笑いぐさに宴席で回した。

74 ルキウス・リキニウス・ルクルスは貴族であり、雄弁且つ富裕でもあった。彼は財務官の時に大がかりな見世物を催し、小アジアではムレナを補佐に得て¹³²、ミトリダテスの艦隊とアレクサンドリアのプトレマイオス王を執政官スラの味方につけた。國務官であった時にはアフリカを公明正大に統治した。対ミトリダテス戦に派遣された際には、カルケドンで攻囲を受けていた同僚執政のコッタを救い出し、キュジコス市を包囲陣から解放した。そしてミトリダテスの軍を兵力と兵糧攻めによって撃破し、王をその王国、即ちポントゥスから放逐した。ミトリダテスが再

¹²⁶ *Sher.* Sempronia ducta 「センプロニアが出廷させられ」 *Pichl.* Sempronia soror Gracchorum producta 「グラックス兄弟の妹センプロニアが出廷させられ」

¹²⁷ *Sher.* Nonio 「ノニウスを」 *Pichl.* Nunnio 「ヌニウスを」

¹²⁸ *Sher.* abrogantes 「無効にしようとしたが」 *Pichl.* obrogantes 「廃案にしようとしたが」

¹²⁹ *Sher.* Memmium 「メンミウスを」 *Pichl.* Mummium 「ムンミウスを」

¹³⁰ *Sher.* quo censetur, dent... 「「…を講ずべし」との決定を下す」 *Pichl.* quo censeretur, darent... 「「…を講ずべし」との決定を下した」

¹³¹ *Sher.* maximoque astu 「そして最上の策を練って」 *Pichl.* maximoque aestu 「そして高熱によって」

¹³² *Sher.* Ministro Murena 「ムレナを補佐に得て」 *Pichl.* Mox per Murenam 「その後ムレナを通じて」

びアルメニア王ティグラネスと共に進攻してきた時には、大いなる天の助けで彼を撃破した¹³³。彼は過度に派手な出立ちを好み、彫像や絵画の熱烈な愛好家であった。後に正気を失い、錯乱状態に陥り始めた時¹³⁴、彼の介護は弟のマルクス・ルクルスに任されることになった。

75 コルネリウス・スラはその運の良さから「幸運者」^{フェリクス}と呼ばれた。彼が幼子の時分、乳母に抱えられていると、そこで出遭った一人の女がこのように告げた。「ごきげんよう、そなたと、そなたの国家に幸先良い御子よ。」そこですぐさま、そう言う貴方はどなたか、と女に問うたが、もう彼女を見つけることはできなかった。スラはマリウスの財務官になった時、降伏したユグルタの身柄をボックスより受け取った。キンプリ・テウトネス戦争では補佐官として優れた働きを見た。国務官の時には民事訴訟を担当し、更に国務官として属州キリキアを統治した。同盟市戦争の際にはサムニテス人とヒルピニ族を撃破した。マリウスに対しては、ボックスの記念碑を撤去させまいと抵抗した。執政官であった時には小アジアを割り当てられ、オルコメノス及びカイロネイアの戦いでミトリダテス軍を潰走させ、アテナイにおいて王の将官アルケラオスを破ってペライエウス港を奪還し、その途上でマイドイ族とダルダノイ族を撃破した。その後スルピキウスの法案によって自分の指揮権がマリウスに移譲されようとしたため、イタリアに舞い戻ると、敵側の軍を買収してカルボをイタリアから放逐し、マリウスをサクリポルトゥスで破り、テレシヌスをコリナ門の前で破った。マリウスがプラエネステで殺された後、彼は布告によって自らを「幸運者」^{フェリクス}と称した。そして公権剥奪のための名簿を貼り出した最初の例となり、^{ウイラ・アフリカ}公会堂では降伏した捕虜九千人を殺害した。また祭司の人数を増やし、護民官の権限を縮小した。彼は国家の秩序を定めた後、独裁官職を辞任した。それ以降は引退して^{しらみ}135ブテオリに退き、虱症と呼ばれる病にかかって最期を遂げた。

76 ポントゥスの王ミトリダテスはペルシア人の七代目の末裔であった。彼は勝れて強靱な精神と肉体の持ち主で、六頭の馬を繋いだまま御し、五十ヶ国の言葉を操れるほどであった。同盟市戦争に際してローマが分裂している隙に、彼はニコメデスをビテュニアから放逐し、アリオバルザネスをカッパドキアから放逐した。また小アジア全域に書簡を送り、しかじかの日にローマ人である者は誰であれ亡き者にせよ、と告げた。そしてこれは実行に移された。彼はギリシアと、ロドス島を除く全ての島々を占領した。だがスラは王を戦闘で破り、その艦隊をアルケラオスの裏切りで横取りし、また王自身をダルダノス市近郊で撃破して屈服させた。更にスラは彼を捕えようと思えばできたのだが、対マリウス戦に急いでいたため、如何なる類の和平であろうと寧ろそれを結ぶ方を選んだ。その後王はカピラで¹³⁶抵抗を続けたが、ルクルスがこれを撃破した。後に

¹³³ *Sher.* Quem rursum cum Tigrane rege Armeniae subuenientem...superavit 「ミトリダテスが再びアルメニア王ティグラネスと共に進攻してきた時には…彼を撃破した」 *Pichl.* Quem rursum cum Tigrane rege Armeniae subveniente... superavit 「救援にやって来たアルメニア王ティグラネスと共に…再び彼を撃破した」

¹³⁴ *Sher.* cum...coepit 「始めた時」 *Pichl.* cum...coepisset 「始めたため」

¹³⁵ *Sher.* unde se receptus 「それ以降は引退して」 *Pichl.* unde sperni coeptus 「そのため蔑まれ始めて」

¹³⁶ *Sher.* Cabiris 「カピラで」 *Pichl.* acrius 「更に激しく」

ミトリダテスは夜戦でポンペイウスに敗北し、自分の王国に難を逃れた。だが王国では民衆反乱を起こした息子パルナケスに塔で包囲されてしまった。彼は毒を仰いだが、以前から多量の薬物で毒に対する耐性を体につけていたせいで、なかなか毒を吸収しなかった。そこで、暗殺者として送り込まれたものの王の顔に満ちた威厳に恐れをなしたガリア人のシトクスを¹³⁷呼び戻し、打ち震える男の手を押さえて自分の暗殺を手助けしてやった。

77 **グナエウス・ポンペイウス・マグヌス**は内戦の時にスラ一派につき、彼から最大級の評価を受けるほどの働きを見せた。シチリアでは公権剥奪された者たちの手から戦わずして同島を奪還し、ヌミディアではヒアルバスに篡奪された同王国をマッシニッサに返還した。二十六歳にして彼は凱旋式を挙げた。レピドゥスがスラの法令を無効にしようと企んだ際には、一私人の身分で彼をイタリアから退去させた¹³⁸。国務官の時には、^{プロ・コンスリブス}両執政官に代わってヒスパニアに派遣され、セルトリウスを破った。その後海賊を四十日のうちに征服し、ティグラネスを降伏へと、ミトリダテスを毒薬へと追い込んだ。これに続き、驚くべき天の巡り合わせで¹³⁹、北方ではアルバニア人、コルキス人、ヘニオコイ人、カスピ人、イベリア人の地に、転じて東方ではバルティア人、アラビア人、そしてユダヤ人の地に侵入し、自身に対する大いなる恐怖をもたらした。彼はヒュルカニア海（カスピ海）、紅海、更にはアラビア海まで到達した最初の人物であった。更にその後、世界の支配権を分割した際、クラッススはシリアを、カエサルはガリアを、ポンペイウスはローマ市を得たが、クラッススが殺された後、ポンペイウスはカエサルに軍を解散させるよう命じた。だがカエサルが敵として現れたためローマ市から追われ、パルサリアで敗れた後にアレクサンドリアのプトレマイオスの元へと逃れた¹⁴⁰。だが彼は妻と子供たちの見ている目の前で、プトレマイオスの将官セプティミウスによって短剣で脇腹を一突きにされてしまった。そして彼は既に事切れていたにも関わらず、その首は剣で切り落とされた。これはこの時代になるまでは思いも寄らぬ事であった。胴部はナイル川に投げ込まれた後、セルウィウス・コドルスの手で火葬され、こう記した墓に葬られた — マグヌスここに眠る —。首はプトレマイオスの臣下アキラスによってエジプト布に包まれ、彼の指輪と共にカエサルに差し出された。けれどもカエサルは涙をこらえようともせず、最高級の香料をふんだんに使って首を荼毘に付すよう計らった。

¹³⁷ *Sher.* Sithocum 「シトクスを」 *Pichl.* Bithocum 「ビトクスを」

¹³⁸ *Sher.* abrelegavit 「退去させた」 *Pichl.* fugavit 「逃亡させた」

¹³⁹ *Sher.* mira felicitate rerum...nunc 「驚くべき天の巡り合わせで…転じて」 *Pichl.* mira felicitate nunc...nunc 「驚くべき天の助けで、まず…転じて」

¹⁴⁰ *Sher.* ad Ptolomaeum Alexandriae confugit. 「アレクサンドリアのプトレマイオスの元へと逃れた。」 *Pichl.* ad Ptolomaeum Alexandriae regem confugit. Eius imperio ab Achilla et Potino satellitibus occisus est. 「アレクサンドリアの王プトレマイオスの元へと逃れた。だが王の命により、彼は臣下のアキラスとポティノスの手で殺された。」

以下は A 系統写本 (o, p) = *Corpus Aurelianum* 版のみ所収

- 78 **ガイウス・ユリウス・カエサル**は、その業績に対する敬意を表して「^{デウス}神君」と呼ばれた。彼はテルムスの幕僚として小アジアに発ったおり、ビテュニア王ニコメデスの元に足繁く通っていたため、男色の謗りを受けた。その後、彼はドラベラを裁判で屈服させた。学問のためにロドス島に向かう途上では、海賊に捕えられ身請け金を払って釈放されたが、更に後になって彼らを捕え処罰した。国務官であった時にはルシタニアを征服し、後にはアルプス以北の全ガリアを、更に艦隊を率いて二度外洋を渡り、ブリタンニアを征服した。自分の凱旋式がポンペイウスによって拒まれると、軍を率いてポンペイウスをローマ市から追い出し、パルサリアで打ち破った。だが彼の首が差し出されると嘆き悲しみ、礼を尽くして埋葬させた。その後プトレマイオスの家臣によって攻囲を受けたが、彼らと王を殺害してポンペイウスの死に報いた。また自身の名高さを使得ってミトリダテスの子パルナケスを潰走させた。アフリカではユバとスキピオを破り、ヒスパニアのムンダ市近郊ではポンペイウスの息子兄弟を大会戦で破った。その後は友人たちに恩赦を与えることで、武器と共に敵愾心も捨てたが、その一方でレントゥルス、アフラニウス、及びスラの子ファウストゥスの処刑だけは命じた。元老院により終身の独裁官に任命された後、カッシウスとブルトゥスが暗殺の首謀者となり、彼は元老院議事堂で二十三の傷を受けて殺された。彼の亡骸が演壇の前に安置された時、太陽はその環を隠した、と伝えられる。
- 79 **カエサル・オクタウィアヌス**はオクタウィウス家からユリウス家に養子入りした。彼はユリウス・カエサルによって後継者に指名されると、その復讐のために暗殺の首謀者ブルトゥスとカッシウスをマケドニアで打ち破った。またグナエウス・ポンペイウスの息子で、父親の資産返還を要求していたセクストゥス・ポンペイウスをシチリア海峡で撃破した。執政官としてシリアを掌握しながらもクレオパトラへの愛の虜となったマルクス・アントニウスとは、アンブラキアのアクティウム沖で雌雄を決した。世界の残りの部分は副官を送って征服した。パルティア人はクラッススから奪った軍旗を自ら進んで彼に返還し、彼が征服しなかったインド人、スキュタイ人、サルマタイ人、そしてダキア人は献上品を送った。また、彼以前には二度しか閉ざされることのなかった — 最初はヌマの治世下で、二度目は第一次ポエニ戦争の後であったが — 双面神ヤヌスの門を、自らの手で閉めた。元老院により終身の独裁官に任命された後、彼はその業績ゆえに「^{デウス}神君アウグストゥス」と呼ばれた。
- 80 **国務官カトー**は監察官カトーの曾孫にあたった。彼が叔父ドルススの屋敷で養育されていた時のこと、マルシ族の族長クイントゥス・ポペディウス（ポッパエディウス）・シロは、カトーに、自分は同盟諸市の側に与する、と言わせようとした。だが金品を使っても脅しを使っても、彼を説き伏せることはできなかった。財務官としてプトレマイオスの遺産から得られた資金を輸送する任を受け、キュプロス島に派遣された際には、最大限の誠意をもってその遂行に当たった。その後、彼は（カティリナの）陰謀の一味を処罰せよ、と主張した。内戦ではポンペイウス派についたが、ポンペイウスが敗北した後はアフリカの砂漠に軍を率いてゆき、その地で自分に与えられていた指揮権を執政官経験者のスキピオに譲った。だが彼の派閥が敗北したためウティカに退き、そこで我が子にはカエサル

の慈悲に与るよう勧める一方、自身は死の美德を論じたプラトンの書を読誦し、自らの命を絶ったのであった。

81 **マルクス・トゥリウス・キケロ**はアルピヌムの出身で、ローマ騎士の父に生まれたが、その血筋はティトゥス・タティウス王に遡るものであった。彼は青年時代、ロスキウスの裁判でスラ一派を敵に回して自身の忌憚りの無い弁舌を披露した。だがそれゆえ受けた憎悪を怖れ、勉学のためにアテナイに向かい、その地でアカデメイア学派の哲学者アンティオコスの下で熱心に学んだ。そこから弁論術を学ぶため小アジアに、更にその後ロドス島に向かい、その地で当時最も雄弁であったギリシア人修辞家モロンに師事した。だがモロンは、キケロによってギリシアはその雄弁の誉れを奪われよう、と涙を流したと言われている。彼は財務官であった時にシチリアを管轄し、造営官の時にはガイウス・ウェレスを強要罪で断罪した。国務官になった時にはキリキアから山賊を一掃し、執政官の時には陰謀の一味を極刑に処した。だがその後プブリウス・クロディウスの憎悪を受け、またカエサルとポンペイウスの煽動のせいで - キケロは二人が独裁を狙っていると嫌疑をかけ、かつてスラ一派を攻撃したのと同じ忌憚りなき弁舌によって彼らをこき下ろしたことがあった - 更に執政官のピソとガビニウスも、このクロディウスの働きかけで属州アジアとマケドニアを報酬として受け取り抱き込まれてしまったため、キケロは追放処分を受けた。だがその後ポンペイウス自身の動議により帰還し、内戦では彼の側についた。ポンペイウスが敗北した後はカエサルの恩赦を進んで受け容れ、カエサルが暗殺された後はアウグストゥスの支持に回り、アントニウスを公敵と宣言した。ところがカエサル（アウグストゥス）、レビドゥス、アントニウスが自らを三頭執政官に任じてしまうと、トゥリウスを亡き者にせぬ限り我らの間で同盟を結ぶのは叶わぬ、と判断された。そこでアントニウスにより刺客が送り込まれ、その時たまたまフォルミアエで休暇を取っていた彼は、自らの破滅が目前に迫っていることを鳥の予兆で知らされた。だが逃亡しようとしたところを殺され、その首はアントニウスの元に送られた。

82 **マルクス・ブルトゥス**は叔父のカトーを模倣しており、アテナイで哲学を学び、ロドス島で弁論術を学んだ。またアントニウスやガルスと同じく、女道化師のキュテリスを寵愛した。彼はカエサルの財務官としてガリアに行くのを嫌がったが、それはこの人物が全ての貴族の不興を買っていたためである。義父のアッピウスと共にキリキアに駐留した際、義父は強要罪で告発されることになったが、一方で彼自身は一言の謗りも受けることはなかった。内戦になるとカトーによってキリキアから呼び戻され、ポンペイウスの側についた。だが彼が敗北した後はカエサルの恩赦を受け容れ、属州総督としてガリアを統治した。にも関わらず、彼は他の共謀者と共に元老院議事堂でカエサルを暗殺した。そして退役兵らの憎悪を受けたためマケドニアに送られたが、ピリッピの野でアウグストゥスに敗北し、ストラトンに自らの首を差し出したのであった。

83 **ガイウス・カッシウス・ロンギヌス**はシリアでクラッススの財務官となり、後者が殺された後は残存兵を集めてシリアに帰還し、(パルティア)王の将官オサケスをオロンテス川の河畔で撃破した。だがその後シリアの物品を買い漁り、恥も外聞もまるで顧みずそれらを売りさばいたため、「^{カリュオク}棗椰子

の添え名を得ることになった。平民護民官であった時にはカエサルを攻撃し、内戦になるとポンペイウスの側について艦隊を率いた。彼はカエサルの恩赦を受け容れたにも関わらず、ブルトゥスと共に反カエサルの陰謀の首謀者となった。そして暗殺に際して一人が躊躇していると、その男にこう言った。「だったら私に代わって、殺したまえ。」そして大軍を興してマケドニアでブルトゥスと合流したが、ピリッピの野でアントニウスに敗北した。彼はブルトゥスの状況も自分と同じだろうと思いついでしまい - そのブルトゥスはカエサル（アウグストゥス）を破っていたのだが - 解放奴隷のピンダロスに自分の咽喉を差し出した。彼の訃報を耳にした時、アントニウスはこう叫んだと言われている。「勝った！」

84 **セクストゥス・ポンペイウス**はヒスパニアのムンダ市近郊で敗北し、兄を失った後、軍の残存兵を集めてシチリアに向かった。同島で奴隷を收容所から出して制海権を握ると、補給路を断つことでイタリアを苦境に陥れた。更に彼は上手く海を制していたことから、我はネプトゥヌスの申し子なりと豪語し、金箔塗りの牛と馬を捧げてこの神を宥めた。和平の成立後、船上でアントニウス及びカエサルと宴席をもうけた際には、「ここが俺の^{カリナエ}船なんだ」などと、なかなか粋なことも言った。それと言うのも、ローマではカリナエ地区にある彼の家をアントニウスが差し押さえていたからである。その同じアントニウスが条約を破った後、セクストゥスはアグリッパの手によって海戦でアウグストゥスに敗れ、小アジアに逃れた。だがその地でアントニウスの手兵にかかって殺された。

85 **マルクス・アントニウス**はユリウス・カエサルの全ての外征に同行し、ルペルカリア祭の日にはカエサルに王冠を贈ろうと試み、またその死に際しては彼に神の荣誉を贈る宣言をした。アウグストゥスに対しては不誠実に振舞ったため、その彼にムティナ市近郊で破られ、ペルゥシア市で兵糧攻めにより完敗してガリアに逃れた。同地ではレピドゥスを同僚として彼と連携し、(デキムス)ブルトゥスの軍を買収して彼を殺した。そして軍勢を立て直してイタリアに舞い戻った後、カエサル（アウグストゥス）と和解した。三頭執政官に任ぜられると、自分の叔父のルキウス・カエサルを手始めに公権剥奪を開始した。シリアに派遣された時にはパルティアに戦争を仕掛けたが、敗北し、十五の軍団のうち僅か三分の一ばかりを率いてエジプトに向かった。だがその地でクレオパトラへの愛の虜となり、アクティウム沖でアウグストゥスに打ち破られた。アレクサンドリアに帰還した後、彼は王の出立ちで王座に座ると、自ら死を選んだのであった。

86 **クレオパトラ**はエジプト王プトレマイオスの娘であった。彼女は自分の弟であり夫でもあるプトレマイオスから王位を騙し取ろうと企んだため、弟によって追放され、内戦に際してアレクサンドリアに居たカエサルの元を訪れた。そして自身の容姿を利用して彼と床を共にすることで、その手を借りてプトレマイオスの王位と命を奪った。彼女は比類なき情欲の持ち主で、それはしばしば我が身を売るほどであり、また比類なき美貌の持ち主で、それは多くの男が自らの死と引き換えに彼女との一夜を買うほどであった。その後彼女はアントニウスと結ばれ、彼と共に敗北し、アントニウスの霊前に供える供物を運ぶ風を装いつつ、その霊廟で毒蛇を用いて最期を遂げた。